Culture,
Energy
& Life

CEL

vol.117
November 2017

特集

ルネッセ

「交」――交流を問い直す

Special Feature / "Society"– Reframing the Interaction

連続特集企画「ルネッセ（再起動）」第2弾では、
「交流（つながり）」を問い直すことで、
都市や地域に埋め込まれた本質を掘り起こし、
現代とつなぎあわせて
新たな価値の創造の仕方を考えています。
かつて、そして現在も、
水路・陸路の結節点には
物とともに人・情報が集まり、
交流・変換が行われています。
内と外からの新たなもの・優れたものと、
その場が持つ本質とを掛け合わせ、
交えて流すという「トランスミッション」を
さまざまな場から問い直します。

CEL
Culture, Energy & Life
vol.117
November 2017

CONTENTS

特集
ルネッセ「交」――交流を問い直す
Special Feature / "Society" – Reframing the Interaction

対談
02 **交流を問い直す**
松岡正剛［㈱編集工学研究所所長］×
池永寛明［大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長］

対談
08 **「天下の台所」に学ぶネットワークと豊かなまちづくり**
安田雪［関西大学教授］×
稲葉祐之［国際基督教大学上級准教授］

対談
14 **「講」的集団とかつてのインフラ事業に学ぶ「交」のあり方**
長谷部八朗［駒澤大学学長］×
尾田栄章［㈱尾田組会長・日本水フォーラム元代表理事］

20 **入唐僧・空海が日本にもたらしたもの**
川﨑一洋［四国八十八ヶ所霊場第28番大日寺住職］＝文

28 **近世の公用交通路と情報の伝達**
丸山雍成［九州大学名誉教授］＝文

34 **木村蒹葭堂のネットワークにみる知の交流**
有坂道子［京都橘大学教授］＝文

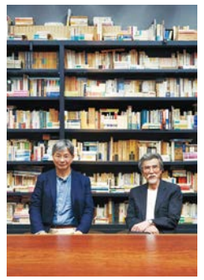
42 **創造性豊かな「民」の都市に花開いた大阪のデザイン**
井川啓［京都光華女子大学短期大学部教授］＝文

［連載］
48 **ことばと交**
方言分布が見せる「坂」「崖」「峰」
大西拓一郎［国立国語研究所教授］＝文

［エッセイ］
52 **わたしと奈良**
はな［モデル、タレント］＝文

［書籍案内］
54 **「交流」を問い直すための10冊**

［CELからのメッセージ］
北前船はなにをはこんだのか？
池永寛明



表紙・扉／「菱垣新綿番船川口出帆之図」（含粋亭芳豊画）。大坂・安治川河口で、新綿を積み、江戸へ向けて競う菱垣廻船と見物客を描いたもので、初物好きの江戸にいち早くその年の新綿を届けるべく菱垣廻船同士で競争する行事が毎年秋に開催された。
所蔵／大阪府／Osaka Archives

交流（つながり）を問い直す

生活文化の基盤であった都市に埋め込まれた価値を取り戻し、再起動へつなげる

連続特集企画「ルネッセ（Renesse）」。第2弾では、前号に引き続きスーパー・アドバイザーの松岡正剛氏とともに、都市における交流のあり方をテーマに語り合う。

増田智泰＝撮影

対談

松岡正剛 Matsuoka Seigow
［㈱編集工学研究所所長］

×

池永寛明 Ikenaga Hiroaki
［大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長］

日本文化にあるインタークロス性

池永　前号から取り組んでいる「ルネッセ」（再起動「Renesse」）ですが、前号の「場」に続き今号では「交」、交流（つながり）を問い直していきたいと思います。

どうも「大阪人」というと、あるイメージを抱かれて、個人という主体が見えづらく、交流する主体や対象が何であるのかが見えなくなっているように感じています。しかしこの主体や対象が見えないという問題は、大阪に限らず、近畿圏、日本が抱えているように思います。そこでまず、交わる主体と対象の個性、オリジナリティが何であるかを明らかにすべきではないか。さらに、「交」を考えるには、外からの活力が集まって交わることができる、環境や風土についての考察も欠かせないのではないか。この視点の重要性は、インバウンドの文脈で語られることはありますが、海外の人を対象とするのみならず国内の人々に対してもなければならない。松岡先生には、多様な意味を持つ「交わり」という文字の読み解きなども含めてお話をいただければと思っています。

松岡　日本における「交」は、たとえば蝦夷（えみし）、陸奥、大和、博多といったように地域によって「交」の視点がズレることもありますし、歴史的なことでいえば、仏教や儒教のように外からやってきた文物が交わるということがありました。

ですが、今一番考えるべき「交」は、交際、交易、交流、交通、それから交換です。要するに「インタークロス」です。英語には、トランスクロスやトランスミッション、トランスファーというように、境界を越えるという意味の「トランス」という語がありますが、日本は万葉の頃からインタークロッシング型に文化や言語、モノを交えるということが多かった。それが「交わり」ということです。これをどう捉えるべきかが、いまだ議論されていません。インターとトランスの違いを考えたほうがいいと思います。

なぜインタークロスが重要になったかというと、内と外の間、私は「リミナル」と呼んでいますが、内と外の間にもうひとつあったのです。中国のように家の四囲を囲んでしまう文化ではなく、開け放しでありながら内と外の間に軒（のき）や庇（ひさし）、縁側、生垣などをつくるということですね。そうすると内と外が呼応する間、際（きわ）に何かができている。これがインターではないか。茶室でいうと内露地、外露地、さらに古田織部や小堀遠州の頃の中露地といったものです。外に縦断的にコミュニケーションするのももちろん大事だけれども、小さなところでもコミュニケートして交を起こす。この多重性が日本の「交」にとっては大きい気はしますね。

池永　それは大阪ガスがやっている実験集合住宅「NEXT 21」の「中間領域」という考え方にもつながっています。プライベート空間でありながら公の空間でもある、内と外の間の空間を「中間領域」と名付けていますが、この中間領域が、これからの住宅のみならず都市や社会構造において重要ではないかと捉えています。かつてはそういった土間や縁側、庭や露地のような世界があったわけですが、現代は空間として無くなるだけでなく、使い方がわからなくなっている。

松岡　そうですね。公と私が交わるところには、中間領域である「共」が出てきます。「共」を「交」につなげること。点が交わることが必要なのですが、それが単一化したり、短すぎたり、切れ切れになっている。共のなかに交がたくさん出てこなければいけないのに、共が生まれるところまできていない。中間領域が単調なんですね。

「和魂漢才」「和魂洋才」にみる日本型翻訳技法

池永　インバウンドで注目が集まっている高野山（こうやさん）ですが、松岡さんは高野山の始祖空海について『空海の夢』という本を書かれています。空海に

代表されるように、外のものや異なるものを取り入れ日本的なるものを生み出してきた日本的翻訳は、「交」の観点としてもポイントだと思いますが、どのようにお考えでしょうか。

松岡　まず、日本は長年にわたる無文字社会だったというところが大きいと思います。文字がなかったので、ボーカリゼーションとしての言葉、ボーカルランゲージが豊富になります。ボーカルなもののなかには「書く」「読む」というリテラシーがなく、オーラルで伝え合うぶん、日本人は「交」も早かったのです。

漢字は外からきたものですが、徐々に日本のものとしていきました。稗田阿礼の語りを太安万侶が万葉仮名に置き換えて、訓読みや音読みにしていく。たとえば池永の「池」や松岡の「松」は音としてはあったけれども、文字としては、後にあてはめていったわけですよね。そこにトランスレーション、翻訳が出てきます。つまり「あてはめ」が起こる。これも「交」なんです。世界のグローバルな基準からヒントを得て、さらに日本的に組み合わせるということをやったという意味において、文字や言葉の翻訳はおもしろいと思います。

同様に仏教や儒教も翻訳しているわけですが、これはまた独特です。空海が梵字まで学習し、かつ日本的に翻訳した「両界曼荼羅」は、インドや中国にあったものから日本的なものに切り替わったものです。さらに浄土教では、源信の『往生要集』の浄土論というのも日本的な翻訳が起こっています。禅は鎌倉時代に入ってきますが、道元の『正法眼蔵』を読むと、中国人には読めない日本的漢文で書かれています。そういうふうに独特な「あてはめ」による交差文化をつくったという意味で、日本的翻訳には画期的なメソッドが潜んでいるように思います。

池永　禅問答も重要だったのではないでしょうか。外国のコンセプトを翻訳して問答しあい、「違うけど同じ、同じだけど違う」ことを日本的に翻訳していった。文字をたんに翻訳、トランスレートするだけでなく広がりを与えていったのではないかと思います。

松岡　禅問答のもたらす暗示世界と間接的な表現力、「こういうものやろ」と絵にして見せるというのが日本的な翻訳力だと思います。

池永　そのように立体的に組み立てる能力を、さらに「天下の台所」時代の大坂には感じます。

日本的翻訳という観点からいうと、幕末から明治にかけて、西洋の文学や学問を日本人は一気呵成に翻訳していきます。たとえば「ソーシャル」を「社会」に変え、「エコノミー」を漢籍から経世済民の「経済」を取り出すといったように、もともとの漢籍の知識をプラットフォームに読み取り翻訳していく能力がすごいのではと思います。

松岡　そうですね。一言で言うと「和魂漢才」というメソッドです。藤原公任の『和漢朗詠集』は、中国の漢詩と日本の和歌を並べていますが、ある漢詩をひとつ選んだあとに和歌が数首続くこともあれば、和歌が続いたあとに漢詩が1篇でうけることもある。そういったように公任が編集し、藤原行成が書に起こしたものが『和漢朗詠集』なのですが、外と内の間に露地があるように、その和と漢にある間が非常に巧かった。外からきた漢字、仏像をつくる技術、屋根をつくりあげる建築技術といったものを使うけれども、あくまでも和の魂でそれをやる。これが、江戸時代に蘭学が入ってきてからは、「和魂洋才」に切り替わった。和魂漢才のメソッドにあった、間の創造力やリミナルな空間力、それを洋においても行ったわけです。中村正直や西周、福沢諭吉が、「スピーチュ」を「演説」という言葉にし、「ソサエチー」を「社会」という言葉にしたことを、中国が驚いて逆に取り入れ、東洋という言葉や資本という言葉を日本から学んだわけですね。こういったところは、日本のすごいところです。しかし最近のグローバリズムには、和魂漢才の頃から続いてきたものがない。

ビジネスにみる つながりの重要性

池永　まさにその課題はビジネスにも関わってきます。天下の台所時代の大坂の商売、「トランスファービジネス」について伺います。

綿花を見て着物にしてファッションをつくる、蝦夷の海藻を見て昆布にしてそれを出汁にして上方料理にする、菜種を見て菜種油にして江戸時代の夜を明るくするというように、全体像をイメージしてビジネスフローを組み立てましたが、まさにさまざまな領域で構築されてきた日本的翻訳力が活かされた。西廻り・東廻り航路という水路ネットワーク、インフラをベースに全国から原材料を調達し畿内で加工し全国に流通した、多種多様な情報をトランスミッション的に変換し価値あるものを生み出し、マーケティングで全国にお届けする。この力を現実にしたのは、株仲間や講という同業者組合などの人的ネットワークと、木村兼葭堂などの多様な人材との交流による学びの場によって商人の力が磨かれたからだと思います。

松岡　おそらく秀吉が大坂に凱旋したことは、すごいことだったのでしょう。つまり下層庶民であった日吉丸から羽柴秀吉を経て太閤になり、大坂に

来てまちづくりをしたということ。町人の学習意欲や、石田梅岩の「心学」や山片蟠桃の『夢の代』などが加わって、懐徳堂だとかになっていったのも、根本は「誰だって天下一になれる」という秀吉の成功によるところが大きい気がします。

また、四天王寺以来のそれまでの大坂は仏都であり、ある意味では吹き溜まった貧困だとか病気だとかがあった。一方で住吉さんみたいに海のネットワークを動かしていた人たちのまちでもあった。そこに秀吉が来たことによって、一から十まですべてを組み変えることが大坂のなかでできると思い始めた。そこに町人や学者、武家たちが手を組んで天下というものをつくるというモデルができた。池永さんの言うトランスファービジネスだと思います。

トランスファーするためには何かを溜めることをしないと駄目だとなったのかもしれません。塩昆布は塩分を溜めるためのものですし、京都の鰊蕎麦ではないけれども、蝦夷から来たものを燻製にしておく、あるいは漬物や佃煮にするとか、そういう溜める方法は大坂だという気がします。あの技術にはまさに上方らしさがある。

池永　大坂でうまくトランスミッションが機能したのは、先ほどの同業者組合、講的な要素が大きいのではないかと思います。116号のお話にもありましたが、海保青陵の「利」に対する編集力、運命共同体が圧倒的な競争力を生み出した。江戸から明治へのビジネス環境が変化するなか、江戸時代につくりあげた「トランスファー機能」を新たな事業環境にあわせ、強みであった運命共同体、同業同志で信用保証や連帯保証する仕組みをベースに、大坂で近代企業や様式を生み出した。

松岡　それは大きい。江戸はもう少しリアルに決済していると思います。金決済と銀決済の違いもありますが、でも大坂は信用買いや担保、手形、あるいは「まったれ」の精神だとか、信用的なものをつくっていますね。信用経済の基礎をつくったのは大坂だという説はまだされていない気がしますが、私の勘では絶対大坂だと思います。

モノ、ヒト、コトを運ぶ 川と海の文化を豊かにする

池永　116号でも少し川のお話が出ましたが、川と湊・港といったネットワークインフラが日本において重要で、モノ、ヒト、コト、情報を交えて流したことでまち・都市をつくりあげました。

松岡　日本は長らく鉄砲水に悩まされてきた。今でも豪雨が降ると川が氾濫しますよね。その対策と堤防づくりをずっとやっているわけです。

私としては、海の文化を、日本の歴史のなかでもっとおもしろくしてもよかったのになあと思っています。海の神話や童話が少ないし、住吉の神さまはいますが、海の神さまが少ないことがとても残念です。残念だけれども、ではその分が何になったのかを考えると、やっぱり川筋文化なんですね。川の文化に置き換わっている。

ですので、道と川の文化史、経済史、人物史、産物史、コミュニケーションの歴史といったもの、つまり交の歴史をもう一度やり直さないと駄目だと思います。その場合、脚光を浴びるのが淀川水系でしょう。石狩川から吉野川まで、信濃川から筑後川まで、日本中のすべての川におもしろいものが残ってはいますが、まるで海のようなワールドモデルをつくりあげたのは淀川水系だろうと思います。そういう意味では三十石船や伏見人形だけではなくて、網の目のような川筋文化というものを、上方や大阪が持ち出すべきだと思います。

松岡氏が主宰する編集工学研究所の玄関口「井寸房（せいすんぼう）」。訪れる者を知の空間へ誘う。

池永　北前船のイベントやフォーラムが増えてきましたが、過去のことを掘り起こすだけでなく、現代的視点でその本質とメカニズムを理解し、現代のビジネスに活かしていく必要がありますね。

松岡　川や海に、恋や冒険や犯罪といった阿鼻叫喚のドラマがあるというふうになったほうが、文化になりやすい。わかりやすく言うと、ジョニー・デップ演じるジャック・スパロウ船長の『パイレーツ・オブ・カリビアン』やマンガ『ONE PIECE』のような、ああいうものを川筋、日本海、大阪の間に起こす。それには銭屋五兵衛や高田屋嘉兵衛といった人物をキャラクターとして立てていくといいでしょうね。

内と外の視点を活かし、新しい情報インターフェイスを

池永　最後に、まちにおけるつながりを考えたいと思います。国はコンパクト&ネットワークを目指しています。人口が減少するなか、地域ごとに駅の周辺に必要な機能・施設を集約していこうとしていますが、世界で一番住みよいまちといわれるメルボルンでは、まず人をベースにして、20分間で必要な場所へたどりつけるまちづくりを進めています。日本はまだまだ開発主義というか、人が減っているなら施設・サービスを集約したらいいというような考えになりがちで、主体である人が見えていないように思います。

近畿はまさにコンパクトです。大阪から40キロほどで京都、神戸、奈良まで入ります。外国人旅行客は、たとえば大阪に滞在して京都、奈良、神戸から滋賀、和歌山をそれぞれのストーリーを描いてエンジョイされている。ロングステイで滞在する人たちも増え、外国人のほうが多様な近畿の使い方というか、近畿の地域性をわかっています。さらに最近は在住外国人や留学生も増えてきているので、意図せずに大きく多種多様、多面的な社会に向かっているのかもしれません。

松岡　私の提案としては、ふたつあります。ひとつは、ヨーロッパでも東南アジアでも台湾でもフィリピンでも、アメリカ人でも中国人でもいいですが、そういう人たちに参加してもらい、彼らが見た大阪、関西、上方づくりをブランディングすること。かつて、ブルーノ・タウトやジョサイア・コンドルが日本のよさを広めてくれたように、彼らには日本を再発見する力があるからです。ただシナリオを自由にさせるのではなく、上方なりにそれを受け止めたインキュベーションの装置をつくったほうがいいですね。

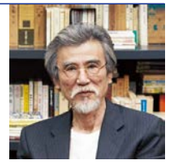
もうひとつは、国内の日本人が大阪を訪れたときに抱く違和感と同化感、おもしろいと思うことと退屈だと言うものを整理すべきです。これは、例えるなら、大阪の寅さんをつくるということだと思います。『男はつらいよ』は、日本各地にエトランゼの寅さんがまるで移民のように訪れるというドラマですよね。どのまちも知らないけれど、そこにあるものや人と出会うことで、ドラマが起こる。あれが、私は必要だと思います。もう一度日本人の大阪エトランゼ、「大阪よう知らん」という人が大阪に来たときに起こすこと、彼らに大阪に出会ってもらうことをやったほうがいい。

どちらも言っていることは同じで、国内外の両方の目が必要だということです。

もうひとつ、電子ネットワークも重要です。インターネットと大阪、上方を考えたほうがいい。今はみんなそれでアクセスをしてくるので、独自の上方インターフェイスをつくる。昔の地図や舟遊びの川堤の図なども、みんなインターフェイスですよね。「こういうふうになっています」というのを電子ネットワーク上で見せられる人が出てこなければ。ですが、グーグルマップの大阪版では駄目ですよ。大阪なりのインターフェイスであり、トランスファーフォームであること。それを大阪がつくったら、世界中からアクセスしてきます。それは、ずっと気になっていたことです。

池永　国内外の目に学び、過去と現在を学び、組み合わせることこそルネッセです。大阪・近畿エトランゼに取り組んでいきたいと思います。

松岡　ぜひ、やってください。



松岡正剛
まつおか・せいごう
㈱編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1944年、京都府生まれ。71年㈱工作舎設立、総合雑誌『遊』を創刊。87年編集工学研究所を設立。以降、情報文化と日本文化を重ねる研究開発プロジェクトに従事。2000年インターネット上にイシス編集学校を開校し、ブックナビゲーション「千夜千冊」連載を開始。『知の編集工学』『知の編集術』『多読術』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』（全7巻）など著書多数。

池永寛明
いけなが・ひろあき
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤労、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。

「天下の台所」に学ぶ ネットワークと豊かなまちづくり

景気が停滞する現代日本の都市とは対照的に、活気を極めた近世の「商都 大坂」。京都でも江戸でもなく、大坂が当時「天下の台所」になりえたのはなぜか。組織や社会集団を中心に、横断的にネットワークの構造と影響を考察する社会ネットワーク分析に従事する安田雪氏と、経済活動を通じたソーシャル・イノベーションを研究テーマとする稲葉祐之氏に、江戸期大坂に学ぶべきまちづくりのネットワーク＝「交」についてお話を伺った。

奥山晶子＝構成
宮村政徳＝撮影

対談

［関西大学教授］安田雪 Yasuda Yuki
×
稲葉祐之 Inaba Yushi ［国際基督教大学上級准教授］

大坂はこうして「天下の台所」になった

稲葉　大坂は江戸期を通じて日本経済の中心地となり、後に「天下の台所」と呼ばれるまでに繁栄しました。なぜ大坂が商業都市としてあんなにも栄えたのか。それは時期的な要素がかなり大きいといえます。今の大阪に初めて大都市が生まれたきっかけは、本能寺の変の後、1583年に豊臣秀吉が大坂城の築城を開始したことです。場所は畿内一向一揆の中心地であり、廃墟と化していた大坂本願寺寺内町でした。

秀吉は荒れ果てた土地で、画期的なまちづくりを始めます。実は、寺内町は淀川・琵琶湖の水運や京都への街道を持ち、堺や兵庫など貿易都市にも近い要衝に位置していました。秀吉は交通の便を利用し、帰順した大名に材料や人夫を差し出させて城とまちをつくっていったのです。遠隔地から大量の物と人が集められるまちづくりは、全国に例を見ない試みでした。こうして大坂城近辺に物が集中するようになると、水運と街道を駆使して物のやり取りが盛んになっていきます。

安田　その状態から「天下の台所」を初めに仕掛けたのは、どういった人たちだったのでしょうか。

稲葉　それは、大量の物や人と一緒に全国から集まってきた商人たちです。物を集め、流通させるには、商品を一時保管しておく場所が必要です。そこで登場したのが、もともと人が住んでいなかった土地に蔵を建て、貸し出し、手間賃をとる商人たちでした。中世までの問や問丸の発展形といえるでしょう。彼らは新しい土地でも、運送や倉庫を兼ねる問屋（といや）というビジネスを行ったのです。

しかしやがて、大坂の商人たちは保管業以上のビジネスを始めることになります。安いときに物資を買っておいて、商品価値が高くなったらそれを売る。物をもっと戦略的に販売するようになり、ビジネス形態は中世の問屋（といや）から差益商人としての近世の問屋（といや）へと変化しました。こうして問屋（といや）という流通の根幹となる仕組みが誕生し、また問屋を他の都市に先駆けて集積させたことで、大坂に多くの商品が集中するようになりました。

なお、江戸幕府が誕生すると、問屋は頻繁に江戸へ物資を送り始めます。するとそこでまた新たなビジネスとしての廻船問屋が登場しました。こうして、問屋が商社的な意味合いを持つようになったのです。また当時の日本では地域によって金貨と銀貨が流通しており、遠隔地間で決済に使われる金貨と銀貨の両替商が次々に生まれて大いに繁栄しました。このように、統一された日本経済の中で次々と新たなビジネスを行っていったのが大坂商人でした。時代の流れに沿って都市ビジネスが高度化していったことが、大坂が「天下の台所」となっていったきっかけだと考えています。

安田　まさにイノベーターともいえる大坂商人たちが、日本や世界を相手にして商売を広げていったダイナミックな活躍は、素晴らしいの一言です。一方で、地域に根付いた商人たちが「自分たちの大坂を盛り上げていこう」と言わんばかりに利益をまちへ還元し、橋をつくり、文化の要となる学校をつくっていったというのも、大坂が発展した要因のひとつであると思います。商人でありながら書物を著した山片蟠桃（やまがたばんとう）などのように、商売をしながらしっかり文化やインフラに還元する人たちがいたことが、大坂を盤石な都市へ育てていったのではないでしょうか。大きな商いをする一方、まちや学問をしっかり支える人もいたということ

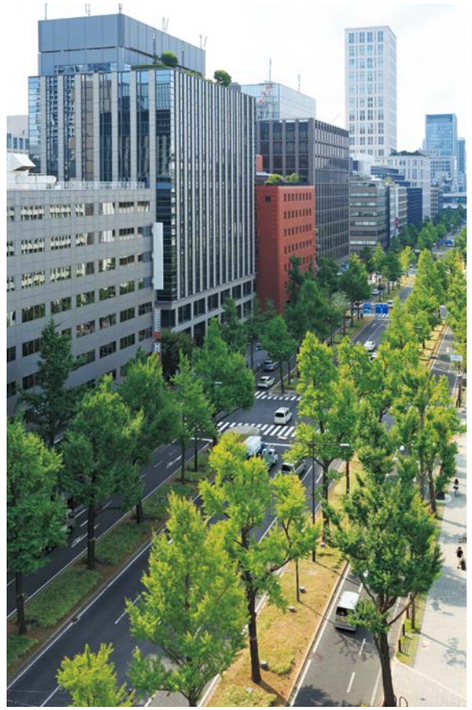
右／堂島川北岸の高架下にある堂島米市場跡記念碑。かつてここは「天下の台所」を支えた大坂3大市場のひとつだった。
左／大阪・天満橋にある八軒家浜船着場。江戸時代、淀川の荷客輸送にあたった船の発着場として賑わい、熊野詣の陸の拠点としても知られた。

に注目すべきだと思います。

私は近年、天神橋筋商店街をフィールドワークしており、そのあたりには大阪天満宮を支える集団としての「講」が機能しています。講とは、もともとは神社や寺院を参詣する人々で組織する団体です。日常的には何らかの拘束があるわけではないのですが、祭りのときには集まって、祭りの担い手としてそれぞれが仕事をします。

その講もお金のつながりではあるのですが、大阪ではネットワークに必ずお金が絡むなと感じることがあります。例えば、アメリカのソーシャルキャピタルなどは、お金を介しないからこその信頼があり、ネットワークと人々のつながりがあるという考え方をします。「災害時などにはお金を介さずに資源や社会的ネットワークを提供し合おう」と、お金が絡まないネットワークが美しいとされています。しかし、講などは必ず経済的な基盤、経済的なチャンスがベースになっていて、それは特殊なことだと思っています。コマーシャルベースのソーシャルネットワークの強さが、大阪の底力の根幹にあるのではないでしょうか。

経済的信頼関係にもとづいたソーシャルキャピタルが根付いていて、天神橋筋商店街の取材からは「私たちはただ隣り合わせただけの商店街じゃない。なあなあの仲良しクラブじゃなくて、みんなでまちをつくっていくんだ」という気概が感じられます。私は「しがらまない絆」と呼んでいますが、そこには経済的合理性を考えたスッキリとした関係性がある。「家族だから」「仲間だから」という絆のなかでは、しがらみが生まれてしまいますから。ある種ドライな「しがらまない絆」の中で、お金が貯まったらそこに橋をつくる、文化をつくるというあり方が、商都大坂を形成していった要因のひとつになっていると思います。



江戸時代、「天下の台所」と言われた船場。現在は80年前につくられた御堂筋が大阪市の中心部を南北に縦断する。

継続性と新規性を支えた「結束」と「橋渡し」

稲葉　ビジネスライクな関係性という意味では、株仲間の発展も注目すべきところです。大坂という、諸国からみれば遠隔地でビジネスをするので、そこでは何より信用が重要視されています。規制のための組織が必要で、そのために株仲間が誕生しました。株仲間はビジネス契約を守らなかった場合の規制があるし、過度な競争も防ぐ仕組みであるため、ビジネスを長期的に進めるうえで重要でした。

それに加えて外のネットワークに関しても、大坂の商人には大きな強みがあったと考えられます。長崎や富山から薬種を持ってきて大坂で売るといったネットワークをはじめ、蝦夷や東北といった地方を経済的に開拓していきます。そして商品作物を全国に広めていくという新規性を持ち合わせていたのが、大坂商人のユニークさだったのでしょう。

そういったネットワークの力が、なぜ大きく発展していったのか。私の考えで言えば、外へ積極的に出ていくことで情報のアンテナが張り巡らされたことが大きかったのだと思います。外へ行けば、新しいビジネスのアイデアが出てくる。戻って「今度はこれをやろう」と挑戦する。その繰り返しが、爆発的なネットワークの力に育っていったのではないでしょうか。

そしてまちの方へ目を向ければ、同じ土地から来た人や同じ業種の問屋仲間が600ものまちを形成していました。外部から来た人たちが、協力し合って橋や学校をつくっていった。

株仲間、講、外部との交流、そしてまちのつきあい。こうしたネットワークが幾重にも重なって商都大坂を形成していったといえます。継続性と新規性のバランスがうまくとれていたのでしょう。

安田　私は、ネットワークにはふたつの形態があると考えています。「結束」と「橋渡し」です。「結束」とは、「この商店街をみんなの力で盛り上げていこう!」というような、体育会系のガッチリとした内向きのネットワークです。「橋渡し」とは、直接的にはつながっていない遠くの人に橋をかけるようなネットワークです。

「結束」と「橋渡し」のふたつのコンビネーションがつくられると、非常に強いネットワークが生み出されます。しかもその得手不得手は人によって違います。内輪での強いつながりに安心できる人もいれば、「それだけでは発展性がない」と外へ飛び出していく人もいる。1人か2人が外へ飛び出していって、ほかの業種や地域に橋をかけていくことができたら、そのネットワークは強靭かつ広範なものになります。

このネットワーク理論は、ヒット商品の開発などにも活用できるものです。1カ所でブームを起こすのと、方々で小さな山火事を起こすように広めていくのとどちらがよいかという議論があります。また、テロ組織のように、広めてはいけないネットワークを封じるためにはどうするかという議論でも使えます。

大坂には、同業者や地域のネットワークをしっかりつくろうという人たちと、橋渡しをしていこうというエネルギッシュな人たちとが共存したからこそ、経済的に面白いことができたのかなと思いました。

稲葉　濃い紐帯をつくり、一方で橋渡しもするというのは、まさに江戸時代の商人のあり方だと思います。水路のネットワークを駆使し、堺、伏見や神戸といった周辺都市ともネットワークを築いて、今の大阪都市圏に通じる経済地域をつくり上げていきました。

「東洋のベニス」にあふれたエネルギー

安田　水路のネットワークは、大坂の特徴的なものだと思います。江戸時代の大坂を表すのに、「東洋のベニス」という言葉がありますね。

稲葉　はい、その言葉は、当時の大坂をよく表している言葉だと思います。中世のベネチアも、人口が10万人くらいしかいない都市国家でしたが、地中海貿易では非常に大きな優位性を有していました。国はとても小さく、しかも水上の都市で、魚と塩くらいしかとれない。のちにベネチアングラスもできますが、情報を通じてしか生き残れなかったのです。東は黒海から西はジブラルタルまで、縦横無尽に商いをしたベネチアの姿は、江戸期の大坂と似ています。

大坂の商人がどんどん外へ出ていこうとした要因にも、大坂の人口の少なさがあったと考えています。江戸時代には、江戸には100万人、京都は40万人以上の人口がいたにもかかわらず、大坂は最盛期でも40万人、少ないときには26万人しかいませんでした。恐らく後背人口の少なさが、廻船を使って遠隔地へいろんなものを回すビジネスを盛んにしたきっかけかと思っています。経済的に安定すると文化も発展するというところも、大坂とベネチアの類似点です。両都市ともお金を文化や学問に使うことができ、それがさらに人を呼ぶことにつながっていきました。

安田　今の大阪も、十分に水の都だと思いますよ。高層ビルなどから街並みを眺めると、淀川はもちろん、さまざまに入り組んだ水路や運河が本当に綺麗で、「このまちは人々が思っているよりもはるかに美しいところだ」とハッとさせられます。内部の人たちが発するエネルギーと、外部からのエネルギーを自由に行き来させているのは、まさに水のネットワークなのだなと、感慨深くなります。

どこへどのように橋をかけるかで、人や文化、そしてそれに伴うエネルギーの流れが変わりますね。このような水路を含めたネットワークを、大阪はもっと現代に活かせるはずだと思います。「天下の台所」のイメージを、現代でもっと発揮できるはずだと感じます。

天神橋筋六丁目商店街。商店街のある天神橋筋は、古くから天満宮の表参道として栄え、江戸期には天満青物市場や歓楽街として賑わった。

「天下の台所」が萎んだ理由

稲葉　江戸時代は国内に統一市場ができた頃なので、発展の余地が多くありました。それにうまく乗ることができたのが大坂で、だから「天下の台所」となれたのです。しかし、明治期になると、江戸時代のような開発はみられなくなります。大阪も、今までとは違う発展のしかたを考えなければならなくなった。いわゆる近代化、産業化へと踏み出さなければならないのですが、産業化を起こす起業家たちは、江戸期の大坂のように1カ所に集まるということがありませんでした。さまざまな場所で起業が行われるようになると、江戸期のような大坂の発展はなくなっていきます。

　また、工業化に重点を置くにしても、江戸時代のように米などの建値市場を獲得したようには、工業製品の市場を握ることはできませんでした。工場をつくってしまえばどこでも物はつくれますから、大阪は工業都市としても非常に栄えましたが、江戸時代のような優位性はなくなりました。また軽工業には強いが、重工業へのシフトチェンジがうまくいきませんでした。とりわけ電話電信の発達で、水のネットワークを駆使したハブとしての地域優位性も薄れていきます。

安田　「天下の台所」というイメージと、工業や大規模なものづくりのイメージとは、すり合わない気がします。やはり流通機能がしっかりしているという大阪の良さを、もっと出していかないと。商売人気質のDNAを活かせるようなしっかりとしたインフラづくりのテコ入れが絶対に必要なのではないでしょうか。

日本の仕事のつくり方

稲葉　現代日本の経済発展について考えると、大阪だけが伸び悩んでいるわけではありません。東京も勢いがありませんね。東京も大阪も、考えなければならないことは同じです。江戸期の大坂は、経済発展のフロンティアに商人たちが挑んで日本全体を発展させていきました。「商都大坂の勢いをもう一度」と考えるなら、アジアなどに対してフロンティア精神を発揮させることができれば、もう一度羽ばたくことも可能かと思います。例えば、環境問題などテクノロジーに関して、発展途上国やアジアにアクションをかけるようなことです。

　それに、今はインバウンドの勢いがすごい。多くの外国人観光客が関西に来ています。そういったチャンスをうまく取り込むイノベーターがいればと思います。

安田　外国人観光客に何かを仕掛けていくとしたら、サービス業に従事している人の地位と評価をもっと上げなければならないと思います。日本では、サービスに従事する人の地位が低すぎます。お給料は安いし、お店はアルバイトを使い捨て扱いするし、それでは働く本人たちのやる気は低下するばかりでしょう。

　また、私のところの学生を見ていても感じるのですが、大阪のような大都市ですら、働けるところが少ない。希望する大阪で就職口を見つけられずに、土地勘のない東京へ出ていって疲労してしまう若者がたくさんいます。全体の求人数が増えているとはいえ、大企業の募集は増えていないという今の状況は、学生にとって辛いものです。これと大阪に限って見てみても、東京より中国や韓国により近いという地の利があるわけですから、アジアと結べるような商取引やサービスをもっと展開し、仕事をつくっていくことに希望があると感じています。

土佐堀川と堂島川に抱かれた中之島の中央公会堂とその周辺。豊かな水路ネットワークから、商都大坂は「東洋のベニス」と称された。

イノベーティブな場づくりの必要性

稲葉　学生の就職状況でいえば、東京にも問題はあります。私のところの学生は、就職はできるのですが、すぐに転職してしまう傾向があるように感じます。若い人たちが希望を持って働けるためにも、大阪のみならず日本全体において、新たなビジネスモデルやイノベーションにおける成功例が必要です。新しいビジネスモデルが誕生するところは、ユニークなことをしようとしている人が集まるところだと思いますが、そういった人たちが集まれるような場づくりを、もっと進めていくべきではないでしょうか。

　江戸期の大坂は、最初に問屋を始めた商人などイノベーターたちが大坂でイノベーションを起こしていったことが、都市としての成功につながりました。現代でも、社会起業家やソーシャルエディター、NPOの立ち上げ人などがたくさん生まれるところは、人のアイデア交換や情報交換が豊かです。意識してそういった場をつくる試みがあるとよいと思います。

安田　梅田のグランフロントには、ナレッジキャピタルという知的交流を目的とした場があります。さまざまな分野のクリエイターや研究者を集め、イノベーションを生み出す場として開設されたようです。まだまだ関西ならではのものという空気は薄いですが、もっともっと地元の人たちを取り込んで、交流の輪が広がるような取り組みをしてくれるように期待しています。

　聞けば、関西の国立大学の大学院などはアジアの学生が多いですね。また、最近では大阪の都心部の土地を中国のデベロッパーが取得しているという話を聞きます。東京よりも大阪の方が1時間フライト時間が短いという大阪の持つビジネス上での地理的優位性に、彼らは気づいているということなのでしょう。

稲葉　江戸期の大坂は外からどんどん人が集まってきて発展の原動力になったので、外国人ビジネスマンたちがたくさん大阪に来て活躍してくれるというのはいいことだと思います。最近ではそうやって越してきた外国人の子どもが増え、大阪は気がつけばとても多国籍になっているのですね。

今の日本に足りない「交」のあり方とは

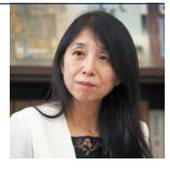
安田　そういった環境で育った子たちが大人になれば、グローバルビジネスの土壌が根付くのかもしれません。東京は、まだそこまで進んでいない気がします。実は、私の姪が外国人との間に生まれたハーフなのですが、「東京の方よりも、大阪や京都の方が、ずっと開放感があって住みやすい」と言っていました。ほんの小さな子でも敏感に感じ取れるほど、寛容度、国際度が高いというのが、「天下の台所」であった大阪の潜在能力なのでしょう。

　大阪ならではの笑いをとる文化には、とにかく人を楽しませたいという意識があらわれています。大阪が外に対して見せるフレンドリーさと熱心なサービス精神には、日本が世界にもっと羽ばたいていくために学ぶべき点が多々あると思います。

　また、江戸期の大坂商人にあった広い視野が、どうも今の大阪には感じられず、大阪の繁栄を中心に考えているような印象がありますが、どうでしょうか。商都大坂は、自分たちだけの利益を考えるのではなく、周囲を、ひいては日本全体を盛り立てていこうという意志の力が働いていたからこそ栄えたと思うのです。大阪に限らず、ビジネスに関わる全ての人たちに、ぜひ日本全体に対する責任感を取り戻してほしいと思います。

稲葉　江戸期の大坂は商都として独立しているけれど、江戸幕府ともよい関係を築いていました。豊臣氏が滅んだ後も、幕府の経済的政策の中にしっかり大坂が組み入れられていたのです。しかし、そこで単に中央からの保護へ依存するのではなく、非常に高い自律性を持ちながら、ビジネスチャンスを活かして協調戦略を編み出していきました。それが、大坂繁栄の理由のひとつでもあり、現代へのヒントにつながると思います。

　今は規制が厳しいなどさまざまな条件があるとは思います。しかし、発展するためにはさまざまな戦略を駆使し、飛躍しなければなりません。飛躍のためには、ある種のエネルギーが必要です。そのエネルギーが出てくる人の集まり、つながりが日本には必要だと感じています。ナレッジキャピタルのようなインキュベーション施設や、各大学にもそういったことが期待できる場がありますが、そういう場がただあるだけではなく、生まれたアイデアをビジネスとしてスムーズに展開できる仕組みが必要です。その仕組みが、早く生まれてほしいと思っています。



安田雪
やすだ・ゆき
関西大学社会学部教授。1963年生まれ。国際基督教大学教養学部卒業後、コロンビア大学大学院社会学研究科博士課程を修了（Ph.D）。東京大学大学院経済学研究科・ものづくり経営研究センター准教授などを経て現職。著書に『ルフィと白ひげ――信頼される人の条件』『パーソナルネットワーク――人のつながりがもたらすもの』など。

稲葉祐之
いなば・ゆうし
国際基督教大学教養学部上級准教授。1970年生まれ。横浜国立大学経営学部卒業後、神戸大学大学院経営学研究科修士課程、ケンブリッジ大学大学院博士課程を修了（Ph.D）。共著に『キャリアで語る経営組織――個人の論理と組織の論理』『大阪新生へのビジネス・イノベーション――大阪モデル構築への提言』など。

「講」的集団とかつてのインフラ事業に学ぶ「交」のあり方

伊勢神宮や富士山など寺社や霊場を訪れる旅は、内外かかわらず高い人気を誇っている。そのおおもととなる「講」というシステムは、時世にあわせさまざまに変化し、宗教を超えた経済や社会に役立つしくみも生み出していた。今号では、「講」の本質を思想面で研究する長谷部八朗氏と、奈良時代に現在のダムや河川改修事業の原型をつくり出した行基集団をインフラ整備の専門知識で分析する尾田栄章氏に、今必要な「講」的交わりのあり方について伺った。

脇坂敦史＝構成
増田智泰＝撮影

対談

［駒澤大学学長］
長谷部八朗 Hasebe Hachiro
×
尾田栄章 Oda Hideaki
［㈱尾田組会長、日本水フォーラム元代表理事］

奈良時代に行われた大事業

長谷部　尾田さんは畿内の歴史について大変に造詣が深い方ですが、私も淀川が好きで、その南東側にある生駒山との関係にはずっと個人的な興味を抱いています。

山腹にある有名な生駒聖天（寶山寺）を詣でるための講も、かつてはたくさんありました。商売の神として大坂商人の信仰を集めたというイメージが強いかもしれませんが、江戸時代には畿内はもとより大変広い範囲から人々を集め、そのなかには大工や魚屋といった職業講もありました。

これとは別に、山麓には朝鮮寺と呼ばれる在日韓国・朝鮮人の方々の信仰を集めるお寺がたくさんあり、私はそれにも関心があって、何度か訪れているのです。あまり知られていませんが、淀川のほとりで韓国・済州島からやってきた巫堂（ムーダン）と呼ばれるシャーマンが祭礼を行うこともあります。おそらく、地元（済州島）の海に淀川を見立てているのではないかと思います。

尾田　それはとても興味深いお話ですね。淀川の下流から見ると、生駒山自体がひとつの大きなランドマークになっています。その海側の山麓地域は縄文、弥生時代を通じて遺跡も多いですし、あのあたりはとても面白いところですね。

長谷部　私は奈良、大阪を含めた宗教文化の重要な拠点だと感じています。尾田さんは、淀川流域でかつて行基が行った数々の土木工事について、1冊の本にまとめられていますね（『行基と長屋王の時代――行基集団の水資源開発と地域総合整備事業』）。

尾田　もともと私は、歴史の専門家ではありません。行政の仕事を通じて河川というものと関わってきたのですが、川と水が人と人を結びつけ、地域の文化といかに深い関わりをもっているか、さまざまな歴史を調べれば調べるほど強く感じていました。

たとえば戦前に土木学会が出した『明治以前日本土木史』という大部の本があるのですが、ここには近代以前に日本の河川がどのように整備されてきたか、流域別の歴史が詳細にまとめられています。ところが、この本のなかには、淀川本川についてはほとんど記述が残っていないのです。なぜかといえば、土木工事の行われた時代が古すぎるからです。他の地域では古くても戦国時代以降というケースが多いのですが、淀川はたとえば行基のような人が奈良時代から大規模な事業を展開していたからなのです。

長谷部　なるほど、歴史の長さが違いますからね。

尾田　『天平十三年記』という、行基の事跡をまとめたひじょうに信頼のおける史料を、私のような人間が土木家の目で読み込んでいくと、とにかく驚かされます。現代の洪水対策用の放水路にも匹敵する大規模な堀や溝、現代でいうところのダムに近いため池といったものを多く含む、これほど大きな規模の事業を行うだけの力を、奈良時代にひとりの僧がどうやってもちえたのか？

長谷部　確かに、現代では考えられないですね。

尾田　今でいえば、スーパーゼネコンと呼ばれるような会社が数社一緒になって、コングロマリットをつくっても、おそらく無理でしょう。しからば政府や官僚の側にそういう構想力があるかというと、それもない。アイデアもコンセプトもなければ、それを実行するだけの能力もない。行基集団について研究することで、そういういわば現代

近鉄奈良駅前の行基像
行基（668～749）は、僧侶の民衆への布教活動を禁じる朝廷に反し、畿内を中心に民衆に仏教の教えを説いた。東大寺造立の勧進役をつとめ、東大寺「四聖」のひとりと称えられるが、池溝の構築などの土木事業、困窮者救済施設の造営など数々の社会事業も行った。民衆と共に生きた僧として今も地元民の誇りとなっている。

の「閉塞感」を打ち破る何かヒントのようなものがないかとも考えているんです。

長谷部　行基とそのまわりの人々を結びつけ、大きな事業を行わせたしくみは、仏教用語でいうところの「知識結」と呼ばれるものですが、ヒエラルキーのない緩やかな組織をつくっているという意味でも、私が研究している「講」と通じるものがあるのではないかと思いました。

「講的なもの」とは何か？

尾田　やはり、そうなのですね。私も「講」というしくみのなかに、かつて行基が行ったような形で大きな変革を実現する、何かヒントのようなものがあるのではないかと思い、今日の対談を楽しみにしてきました。

ある辞典によると、講は「人々が自由・対等の資格で、かつ自由意志に基づいて共通目的のために結集する非職業的組織」と説かれているそうですね。これが正しい定義なのかどうかは分かりませんが、これからの社会にとって、ある意味で最も必要なものではないかと感じました。過去の歴史のなかで、講はどういう大切な役割を果たしてきたのか。今、何かをするうえで参考になる点があるのであれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

尾田栄章氏が立ち上げた「日本水フォーラム」のオフィスがある箱崎町からも近い日本橋橋上にて。かつて「渋谷川再生」の活動もしていた尾田氏は「日本橋の上部にかかる高速道路地下化の問題も含め、川の再生を目指す活動にも講的視点が必要」と話す。

長谷部　私の問題意識のなかにも、ひじょうに共通する部分があると感じます。なぜ講を研究するのか。講などというものは、もう遠い昔のテーマであり、もはや新しい知見は出てこないのではないか、と考える人もいます。

確かに講と呼べるものは減っているかもしれませんが、「講的なもの」は今も日本の共同体のなかに名前を変えてあるし、むしろ、曖昧で人々がアトム化（孤立化）しているような今の時代だからこそ、それが重要な意味をもち、その内的論理を知る必要があるのではないかと私は思っています。

尾田　狭い意味での講だけを考えるのではなく、「講的なもの」という視点ですね。

長谷部　たとえばサークルとかクラブとか、○○会などと名前は変わっているかもしれませんが、よく見てみると、これは講と変わらないんじゃないかと思うことは少なくありません。

かつて講の研究者で桜井徳太郎という方がいました。柳田國男の門下でもある民俗学の泰斗ですが、そのような切り口で講を研究した最初の人だったと思います。彼は講というもののしくみを、かつて日本人が結び合ってきた原理として捉えようとした。過去の遺物としてスタティックに見るのではなく、今に生き、変わりつつあるものとしてダイナミックに研究すべきと考えたのです。

尾田　私は先日、奈良市の元興寺で弁天講の一員に加えていただきました。境内の弁財天を信仰する人たちが、さまざまな分野の人を招いて話を聞くというような面白い会です。社会的な側面と宗教的な側面をあわせもった講の典型的な形だと思いますが、こうした地域の信仰や人と人のつながりによる集まりが、社会を変えていくだけのエネルギーをもちうるとは感じられないのですが。

長谷部　講というものは、あえて「いい加減」となんですね。そこにみんなが共鳴して集まってくる。縛りも、ほとんどない。あの人こないよね、まあいいじゃない、みたいな形。この緩さ加減が講を持続させていく。だから、「有名な、歴史に名を残す講」というのは、講の本来的な姿ではないのだと思います。今も数千人のメンバーをもつような大きな講が存在しますが、そんなふうに大きく組織化されてしまうと、本来的な講から外れていってしまう。いつのまにかでき、いつのまにか消失していく講というのも、結構多い。講というのは、むしろその方がいいんです。

尾田　そもそも、講の本来的な姿というのは、どういうものなのでしょうか？

長谷部　講的な集団のなかでは、地位とか役割といったものがあまり明確になっていないことが多い。一方で経済的な側面がある。そのほかに娯楽的な側面、宗教も含めた文化的な側面や社会的な側面がある。さまざまな側面が一緒になって成り立っているものなんです。カオスとまではいわないけれども、混沌としたものをあえて排除しない。だから、講が大きな力になって次へのステップとなり、そこから新たな集団ができていくということも珍しくありません。新たな動きを閉じ込めようとしない、いわばゴムまりみたいに柔軟な集団です。

尾田　講というのは、ものすごくフラットな組織ですよね。誰か世話役がひとりいて、あとは同じレベルでみんながいる。そこから、いろいろなうねりが出てくる。いつの時代もクリエイティブな仕事をしようとしたら、フラットな組織じゃないとダメなんですよね。

長谷部　その通りです。ただ、フラットな組織が機能するために、「この指とまれ」という誰かが必要になる。行基はまさにそういうキーパーソンだったのでしょうね。

尾田　行基のつくった集団のしくみも、そのような融通無碍なものではなかったかと思います。だからこそ、朝廷が「小僧（僧を軽蔑する言葉）行基」などと罵って恐れるほどのすごい勢力になったわけです。行基が畿内一円に開基したと伝えられる四十九院というのは、数千、数万人という人々が集まった宿泊所、いわば飯場だと私は考えています。行基が中心となって描いた淀川流域の未来像に、多くの人々がつぎつぎと呼応した。そうした「講的なもの」の拠点だったのではないかと思うのです。

長谷部　尾田さんのお話を聞いて私が思い出したのは、一遍上人のことです。鎌倉時代に生きた時宗の開祖として知られていますが、当時それは「時衆」と呼ばれていて、宗派ではなかった。集まるときに集まればいい、それは一時的でもいいんだよ、というのが一遍の考え方でした。「時衆」においては、仏教で「知識」と呼ばれる人たちが緩やかに指導者的な役割を果たしましたが、実際はごちゃごちゃに活動していくんですね。これがあったからこそ、爆発的な勢いで民衆を取り込んでいくことができた。

しかし、やがて宗教化、組織化が進んで時宗が形成されていくと、「衆」のもっていたエネルギーはだんだん失われてしまうのです。

尾田　行基と一遍の例は、よく似ていますね。

講によって結ばれた「内と外」

長谷部　少し話が飛躍してしまうかもしれません

が、近代以前の共同体、とりわけ地域共同体の社会原理は「内と外」であると思います。基本的には自己完結した閉じた社会ではあっても、「内と外」はいつも微妙にバランスをとっていました。閉鎖的な共同体のなかに、どうやって風を通すかという知恵をかつての人々はもっていた。

近世においては、とりわけ代参講、参詣講とか呼ばれるものが、そういう外からの風を入れる役割を果たしたと思います。

尾田　代参講というのは、村落のなかから代表を立て、遠い寺社や霊場へお参りに行くわけですよね。

長谷部　村の外へ行くということは、それだけできわめて開放的な経験ですが、開放感に浸ると同時に外の空気を持ち帰ってきて、地域共同体に新しい風を入れることができました。このとき外部は、内の原理を補強するためのものでもあります。いわば外を飼い慣らしていくのであり、外から持ち込んだものが内部を完全に破壊することはなかった。

尾田　なるほど。交流によって、外から持ち帰った新しいものが脅威になるのではなく、それが内部を少しずつ変えていき、力に変えていくことができるというイメージなんですね。

長谷部　江戸時代に、なぜあれほど伊勢参りが盛んになったか？

やはり伊勢講があったからだと思います。講による参詣は、伊勢音頭のような楽しみも積極的に取り入れていくんです。各地から集まってくる参詣者が踊り、歌いながら歩いていく。それぞれの地域バージョンがあるんですが、それを互いに披露し合う。これは、最近の若い人たちが踊っているYOSAKOIにも似ていると思います。そして、帰ってきた参詣者たちを「境（坂）迎え」する。村のなかではなく、まずは「境」で飲食をし、そこで「外の論理」はシャッフルされるわけですね。外部との境界である「界隈」がもつ力、恐ろしさを人々はよく知っていたのです。

尾田　そこで直会（なおらい）をするわけですね。私はかつてモロッコ空港でメッカへの参詣者たちを見たことがあります。全員が白装束という、その熱気とエネルギーは、私たちが見慣れた観光客やツアーといったものとは、まったく違うものでした。

長谷部　今はその大切なトランスファー（移動）という経験が、消費行動のなかに絡め取られてしまっている部分が強いですね。たとえばツアー、旅行会社、観光業といったものが、かつて講が果たしていたことを補完しようとしているという見方がありますが、私は必ずしも賛成しません。

確かに、近代化の途上で交通インフラが整備され、たとえば参詣客の減っていた寺社に鉄道会社やバス会社が「テコ入れ」という形で入っていった。あるいは、かつて伊勢参りで御師（おし）がやっていたような宿を、旅行会社が「講」の名を借りつつ新しい旅館のような形で売り出していく。そのなかで、信仰的な核のようなものが失われてしまった場合も多いし、もちろん新たな形で再生した例もあるでしょう。いずれにせよ、講とツーリズムがまったく同じ役割を果たしているわけではありません。

尾田　いわゆるツーリズムは、基本的に1回きりなんですよね。講のようにある期間、継続してやるものとは違うでしょう。その継続という意味では、やはり人々が集まる「目的」をどのように設定するのか、が大切だと感じます。

長谷部　かつて地域と講が一体化していた時代は、共同体とオーバーラップするような形で、日常生活万般を講のなかでやっていくということがあったわけですよね。今は、目的が曖昧なままに集まろうとしても難しい。「この指とまれ」といったとき、それがどういう意味をもっているのかということが、人々に分かりませんとね。

現代における異文化の共生と「下からの変革」

尾田　お話を伺って、現代にいて「講的なもの」がどのような意味をもちうるか、私なりにクリアな像が見えてきました。第2次世界大戦後の日本は一度カオスを経験しましたが、その後の70年であらゆるものをヒエラルキー化、組織化してしまったんですね。そういう形の定まった組織のなかで個人がいくら動いても、なかなか社会は変わっていくことができない。だから、会社組織のようなものとはまったく異なる形で個人が帰属意識をもてるような集合体というか、自発的に参加するような場をつくり、そこでの経験や学びが元の組織のなかに生かされていく……。そういうしくみが日本社会のなかに必要なのではないでしょうか。

長谷部　私がこういう研究をしようとしたのは、まさにそこだったんですね。それは可能なのではないかと思っています。

尾田　私事ですが、行基生誕1350年である来年に向けて何かやっていこうということで、お坊さんから研究者まで、さまざまな分野の人たちが集まりました。私たちはそれを「行基鍋」と呼ぶことにしたのですが、まさに新しい「講」のはじまりだと思っています。行基の活動範囲であった畿内全体がしっかりしていくために何をすべきかといったことを考える場をつくる。今日は、そのためのヒントをたくさんいただきました。

長谷部　講というのは、集団を指す言葉でもありますが、場を指す場合もあるんですよね。ですから、「鍋」という名前はとても相応しいと思います。

最初に少しふれたように私は畿内の文化が好きで、特に在日朝鮮人や沖縄の人々の文化が根づいている、大阪の生野区や大正区といった場所をよく訪ねます。こうした興味が、どこかで講の研究にもつながっていると思うのは、人々が集まったところに生まれる混沌とした力が、とりわけ強く感じられるからなのかもしれません。

尾田　関西の人は、そういうカオスが好きですからね（笑）。

長谷部　そういう共生の文化が古くからしっかりと組み込まれているんでしょうね。私の住んでいる地域の近辺では少し前からブラジル人の人口が増えており、小さな共同体がつくられはじめています。元から住んでいる住民の側には、やはり抵抗というか、閉鎖性も見られます。大阪のような文化をいくら真似しようとしても、そう簡単にはいかないものです。行政の側でも、カタカナ語の「コミュニティづくり」というような形で両者の融合を図ったりするわけですが、その経験もノウハウもない。きちっと地に足のついた方策ができるのだろうか？という疑問を感じます。

講のようなコミュニティのあり方というのは、見たくないような部分、非合理な部分も含んだものですから、これからの日本社会が他者とどうやって付き合っていくべきか、という意味でも、ひじょうに役に立つ視点を提供してくれるのではないでしょうか。

尾田　異文化の共生というのはひじょうに難しいものであって、よく役場の職員なんかが「下からが大事」などと言って住民を後押ししようとするのですが、それはやっぱり「上から」と一緒なんですよね。畿内には古代から多くの渡来人が逃れてきて、彼らを迎えた歴史もある。

長谷部　その通りですね。

尾田　これまで、「まちづくり」と総称されるような活動にいろいろな立場で関わってきましたが、常に思うのは、パブリックと住民ひとりひとりの両方がしっかりと機能していなければ、何もできないということです。本当の意味で人々が「下から」変えていくための「講的なもの」をつくり、それを行政や企業がじんわりと支えていくようなしくみをつくる。個人と組織という、ふたつの立場をつなぐために必要なものとは何かという視点でも、今日の話はひじょうに有益だったと思います。本当にどうもありがとうございました。

『伊勢参宮略図』　歌川（安藤）広重
「一生に一度は伊勢参り」「伊勢に七度、熊野に三度、お多賀様には月参り」といわれたように江戸時代の人々はこぞって伊勢参りをしていた。当時、大坂の玉造を拠点に全国を行商していた唐弓弦師・松屋甚四郎と源助は、旅籠の組合「浪花組（後に浪花講）」を立ち上げ、今の協定旅館のルーツをつくり、さらに旅のガイドブック『浪花講定宿帳』を発行するなど、「講」は経済や社会活動にまでどんどん広がっていった。
所蔵／玉造稲荷神社

伊勢音頭
江戸時代、この地方でうたわれる木遣（きやり）唄、祝儀唄、道中唄、盆踊り唄、座敷唄などが、御師や全国から伊勢参宮をした人々により各地に広められたとされ、いつしか憧れの地名をつけ『伊勢音頭』と呼ばれるようになった。地域により踊りの形もさまざまに変化し、その起源をさぐることは困難だが、伊勢市の催事「伊勢まつり」で披露される伊勢音頭は最も原型に近いとも言われている。
写真提供／伊勢市役所産業観光部観光振興課

長谷部八朗
はせべ・はちろう
駒澤大学学長。1950年生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。駒澤大学仏教学部教授を経て2017年より現職。著書に『「講」研究の可能性』（Ⅰ～Ⅲ）、『祈祷儀礼の世界――カミとホトケの民俗誌』、共著に『般若院英泉の思想と行動――秋田「内館文庫」資料にみる近世修験の世界』など。

尾田栄章
おだ・ひであき
㈱尾田組取締役会長。1941年生まれ。京都大学大学院工学研究科を修了後、建設省に入省。98年に退官後、「日本水フォーラム」「渋谷川ルネッサンス」などNPO法人を立ち上げ代表に就任。2013年より福島県広野町職員として復興支援の活動を経て現職。著書に『行基と長屋王の時代――行基集団の水資源開発と地域総合整備事業』など。

入唐僧・空海が日本にもたらしたもの

川﨑一洋
Kawasaki Kazuhiro

真言宗の開祖であり、傑出した思想家・芸術家であった空海。唐の新しさを日本へ移入し、どのように曼荼羅的な独自の密教思想をつくりあげたのか。博学的な知識と類まれなる好奇心、内外のネットワークをもとに、言語、美術、書、教育、土木技術など、ソフト・ハードの両面において文化の翻訳に従事した空海の事績から、その方法論を学ぶ。

かわさき・かずひろ
1974年生まれ。高野山大学大学院博士課程修了。博士（密教学）。専門は密教史、仏教図像学。ネパールやチベットの各地でフィールドワークを重ねる。現在、四国八十八ヶ所霊場第28番大日寺住職。高野山大学非常勤講師、高野山大学密教文化研究所委託研究員、国立民族学博物館共同研究員。著書に『弘法大師空海と出会う』（岩波新書）、『四国「弘法大師の霊跡」巡り』『弘法大師に親しむ』（以上、セルバ出版）、『最新四国八十八ヵ所遍路』（朱鷺書房）などがある。

嘆願書をしたためる

艱難の身を亡ぼすことを知れども、しかれどもなお、命を徳化の遠く及ぶに忘るるものなり。〈その道程が困難で、時として命を落としてしまう危険があることを知りながら、遠く聞き及んだ皇帝陛下の徳に触れたい一心で、死の恐怖を忘れてやって参りました。〉

（中略）

猛風に頻蹙して葬を鼇口に待ち、驚汰に攢眉して宅を鯨腹に占む。

〈大風が吹けば、恐ろしさに顔を顰め、自分の屍が海亀の餌になってしまうことを覚悟しました。大波が寄せれば、驚いて眉を寄せ、海に放り出されて鯨の腹の中に呑み込まれてしまうことを思いました。〉

（中略）

乍に雲峯を見て欣悦極まりなし。赤子の母を得たるに過ぎ、旱苗の霖に遇えるに越えたり。

〈突如として陸地に聳える高い山が見えた時には、喜びのあまり感極まってしまいました。その喜びたるや、赤子が母に会って胸に抱かれた時の喜びよりも、旱魃で枯れゆこうとする苗が雨を得た時の喜びよりも、はるかに大きなものでした。〉

これらの文章は、弘法大師・空海が記した書簡の中でも名文として知られる、「大使、福州の観察使に与うるがための書」からの抜粋である。

延暦23（804）年8月10日、空海を乗せた遣唐使の船は、1ヶ月余り海上を漂い、九死に一生を得て福州長渓県の赤岸鎮に流れ着いた。しかし、天皇の国書を携えていなかった一行は、船を封鎖されたあげく、砂浜に建てた仮屋で50日にも及ぶ待機を強いられたという。

そこで、唐の言葉に巧みであった空海が、遣唐大使の藤原葛野麻呂に代わって筆を執り、入国を請う嘆願書をしたためた。それが、前掲の書簡である。

教養に満ちた、格調高い空海の文章は、福州の役人たちを感服させ、一気に事態の打開へとつながった。空海の、鮮烈な国際舞台へのデビューである。

さて、かくのごとく入唐を果たした空海が、仏教に関するもの以外に、日本へ何をもたらしたのか。本稿では、その一端を紹介しながら、宗教家としてではなく、「文化人」としての空海が残した功績について考えてみたい。

入唐までの半生

空海は、奈良時代の後期、宝亀5（774）年に誕生した。父の名は佐伯直田公という。佐伯氏は、讃岐の多度郡（香川県善通寺市のあたり）に蟠踞した有力な豪族であり、氏寺を所有していたことが知られていることから、空海が仏教に慣れ親しんで育ったであろうことは容易に想像できる。母は、阿刀氏の女。阿刀氏は、学問によって朝廷に仕えた知識階級の名門で、宿禰の称号を得て畿内に居住していた。

真魚と呼ばれた幼少時の空海に関する詳しい記録は残されていないが、「貴者」あるいは「神童」と噂されるほどの秀才であったと伝承されている。

15歳になった空海は、上京して母方の舅である阿刀大足の許で、「藻麗」すなわち漢詩文を読むための学問を本格的に始めることになる。大足は、桓武天皇の第三皇子、伊予親王の個人教師を務めた人物として知られている。そして18歳の時、最高学府であった都の大学に入学する。中国の古典を修める明経道を専攻した空海は、将来25歳までに登用試験に合格すれば、官吏への道が約束されていた。

しかし空海は、仏門を志して大学を去り、出奔してしまう。24歳の時に、儒教、道教、仏教を比較し、仏教が最も優れていることを論じた『聾瞽指帰』を著して以降、31歳で入唐するまでの空海については、虚空蔵求聞持法という密教の修法に出会い、それを実践したということ以外、謎に包まれている。

真如様式の弘法大師像
空海は唐より密教を日本に持ち帰っただけでなく、そこから独自の翻訳技法を用いて日本の文化的母体を築いた万能の天才だった。
所蔵／室生寺（写真提供／飛鳥園）

この空白時代の空海については、私度僧となって、吉野や紀伊、四国などの各地で山林斗藪の修行に没頭したことがクローズアップされることが多いが、それ以上に、奈良の諸大寺を訪ねては仏典を読みあさり、すでに日本に入っていたいくつかの密教経典に触れて、その内容に関する疑問を抱いていたに違いない。

奈良時代、ペルシャ人の役人、破斯清通が活躍したことが知られているように、平城京は国際色豊かであった。空海は経典を研究する傍ら、鑑真和上とともに来日し、唐招提寺に住していたソグド人僧の如宝や、入唐留学より帰国した大安寺の戒明などを訪ね、唐の仏教事情について伝聞し、そこに密教を学ぶことへの憧れを募らせていたであろう。そして彼らを通じて、唐の言語の修得にも努めていたはずである。

延暦23（804）年、そんな空海に入唐のチャンスが巡ってくる。前年に派遣された遣唐使船がすべて難破してしまったため、再挙する遣唐使のメンバーとして、空海が臨時採用されたのである。空海がその出発の直前に、国が認める官度僧となるための得度の儀式を、急遽受けたことが知られている。

なお、一介の私度僧であった空海が、なぜ遣唐使の一員になり得たのか。それについては、伊予親王が後ろ盾になったとか、藤原葛野麻呂が通訳として推薦したなどの仮説がある。実際に空海は、冒頭で取り上げた入国を請う嘆願書のほか、唐の隣国の渤海国の王子に宛てた書簡などの代筆を葛野麻呂から依頼されており、後者の説が有力と思われる。いずれにしろ、空海の出色の才能と強い求法の意志が、奈良の仏教界や親族など、空海の周囲を動かしたのであろう。

飽くなき探求

ようやく入京が認められた空海は、11月3日に福州を発ち、昼夜を隔てぬ強行軍で、12月23日に長安（現在の西安）に到着した。

シルクロードの起点にして、東洋のメトロポリスであった、唐の都・長安。その城郭は、東西10㎞、南北9㎞の規模を誇ったという。遣唐使の一行は、碁盤の目のように整備された城内の、宣陽坊という区画の官舎に2ヶ月ほど滞在した。宣陽坊は、ひときわ賑やかな東市の西に位置し、そこからは、長安のシンボルともいえる大雁塔も望めた。

この2ヶ月の間にも空海は、華やかな長安の市井を探索し、仏教以外の多彩な知識を吸収したものと思われる。のちに嵯峨天皇を喜ばせることとなる、高名な詩人の作品や書跡の逸品を旺盛に蒐集したのも、この時期のことであろう。また、文人墨客を直接訪ねては、詩文や書の技法を熱心に学んだであろうことは、空海が著した漢詩文を作る際の手引書『文鏡秘府論』の序文に見られる「長じて西泰（中国）に入り、粗、余論を聴く。」の言葉や、嵯峨天皇に劉希夷の詩集を献上した際に添えられた上表文にある「余、海西（中国）において頗る骨法（書の技法）を閑えり。いまだ画墨せずといえども、稍、規矩（筆法の規則）を覚れり。」という表現によって裏付けられる。

藤原葛野麻呂たちが朝貢の任を果たして帰国の途についた2月11日、空海は西市に近い延康坊にあった西明寺に居を移した。そこで大師がまず始めたのは、梵語のマスターであった。西市の北に位置する醴泉寺に住んでいたインド僧の般若三蔵や牟尼室利三蔵の門を叩き、インドの宗教事情全般についても聴聞している。北西インド出身の般若三蔵は、母方の親族にイラン系の名前が見られることから、混血の西域人であったとも考えられている。また西明寺には、カシュガル出身の慧琳という学僧がいた。空海の周囲では、梵語のみならず、西域地方の胡語も飛び交っていたことであろう。このあと登場する恵果和尚の在家の弟子であった呉殷が記した『恵果阿闍梨行状』によれば、空海は「梵漢差うことなし」すなわち、インドの言葉と中国の言葉を同じように自在に操ったといわれる。

そしていよいよ、青龍寺の東塔院に、運命の師である恵果和尚を訪ねる日がやってくる。恵果は、唐土に本格的に密教を定着させた不空三蔵の後継者で、代宗、徳宗、順宗の三代の皇帝からも厚い帰依を受け、その許には、アジア各地から千人もの弟子が参集していたといわれる。

恵果は空海と対面するや否や、私はあなたをずっと待っていたのだと大いに歓喜し、すぐに受法の準備を整えるよう空海に告げる。かくして6月には密教の伝授が始まり、8月には、空海を伝法阿闍梨、すなわち密教の正統な指導者として承認するための、灌頂の儀式が開かれた。恵果から皆伝を得たのは、数多の弟子たちの中で、空海を含む2人のみであったといわれる。

伝法を終え、経典、法具、曼荼羅などを空海のために用意した恵果は、「早く日本に帰って密教の教えを人々の幸福のために役立てよ」と遺言し、その年の12月に入滅する。その遺命に従うべく、空海は、20年と定められていた留学期間をわずか2年に短縮して、帰国することを決意する。

そこへ偶然にも、高階遠成が率いる臨時の遣唐使がやって来る。空海はすぐに遠成に宛てて申請書を提出し、帰国の許可を得た。このように、空海の入唐求法には、奇跡ともいうべき幸運がいくつも重なった。

漢詩を贈り合うなど、短い時間で知友たちと別れの挨拶を交わした空海は、思い出深い長安をあとにし、806年の8月に明州の港を出帆。再び怒涛を越えて故国を目指した。なお、空海の探求心は止むことを知らず、帰路の途中で立ち寄った越州でも、仏典はもとより、詩賦（文学）、碑銘（歴史）、卜医（医学）、五明（芸術）に関する文献など、入手し得る限りの書物を蒐集している。

嵯峨天皇との交流

その詳しい時期は不明であるが、空海は九州に帰着し、筑紫の大宰府に入った。大同元（806）年の10月には、請来した経典、仏具、仏画などの目録を作成し、みずからが密教の正統な後継者となったことを表明する上表文とともに、朝廷に送っている。

しかし、朝廷は沙汰を与えず、空海は3年近くの間、大宰府に留め置かれることになる。その理由については、留学期間を短縮して無断で帰国した「闕期の罪」に問われたとか、阿刀大足と関係があった伊予親王の謀反事件の影響を被ったなど、多くの推論がある。

大同4（809）年、新たに嵯峨天皇が即位すると、ようやく空海の入京が認められる。最先端の唐の漢字文化に並々ならぬ関心を持っていた嵯峨天皇は、その年の10月、空海に命じて劉義慶が撰した『世説新語』の文章を屏風2帖に揮毫させている。空海の書の才能について、すでに聞き及んでいたのであろう。なお、嵯峨天皇自身も、空海、橘逸勢とともに「平安の三筆」に数えられるほどの能筆であった。

その後、空海は頻繁に、唐より持ち帰った著名な書家の書跡や拓本、みずからが筆を揮った書を献上し、嵯峨天皇との親交を深め、厚い信任と強力な庇護を得た。そして、密教宣布の道を、確実に歩んでゆくのである。

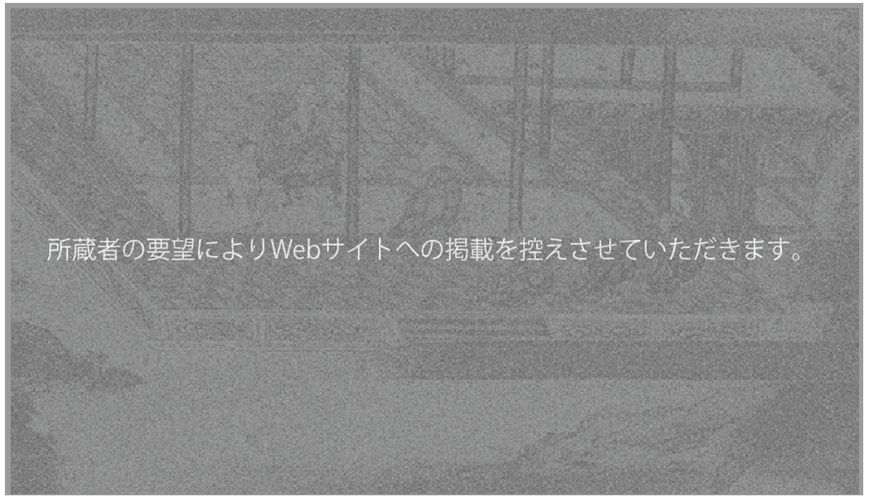
参考までに、献上された書跡などの一部を挙げれば、以下のようなものがある。

王羲之の『蘭亭碑』1巻と『諸舎帖』1首、劉希夷の『詩集』4巻、王昌齢の『詩格』1巻、褚臨王の『貞元英傑六言詩』3巻、徳宗皇帝の真跡1巻、欧陽詢の真跡1首、張誼の真跡1巻、除浩の『宝林寺詩』1巻と『不空三蔵碑』1首、李邕の真跡屏風書1帖、朱画の詩1巻、朱千乗の詩1巻、王智章の詩1巻、飛白の書1巻、『古今文字讃』3巻、『古今篆隷文体』1巻、『梵字悉曇字母並釈義』1巻等々

「飛白の書」から知られる飛白体は、刷毛書きのような独特な書体で、空海は正統派の書法に精通するいっぽう、さまざまな雑書体も本邦に紹介している。『古今文字讃』や『古今篆隷文体』は、まるで絵画のようなユニークで創造性に富む書体を、図鑑のように掲載する。また『梵字悉曇字母並釈義』は、インドの文字の解説書である。ちなみに空海は、梁の顧野王が撰した『玉篇』に依拠して、現存する日本最古の字書である『篆隷万象名義』30巻を編纂している。

さらに、唐で学んだ技術を応用して作った筆が進献されることもあった。次の文章は、弘仁3

空海入唐地図
九州を出帆した4艘の遣唐使船は、次々と遭難し、消息不明になった船もあったという。空海を乗せた船は1ヶ月余り洋上をさまよったあげく、現在の福建省北部に流れ着いた。



『弘法大師行状絵詞』
第三巻より「青龍受法」の場面
西明寺の僧たちとともに、空海が長安の青龍寺に恵果和尚を訪ねた時の様子を描いたもの。画面向かって左の童子を従えた人物が恵果で、中央の人物が空海。
所蔵／東寺（教王護国寺）

所蔵者の要望によりWebサイトへの掲載を控えさせていただきます。

弘法大師筆尺牘三通

一通目　国宝

空海が最澄に宛てた書状3通を1巻に収めたもので、最もよく知られた空海の真筆。1通目の書き出しに「風信雲書」とあることから『風信帖（ふうしんじょう）』と呼ばれる。

所蔵／東寺（教王護国寺）

『古今文字讃』

中巻

古文篆、籀文篆など、21種のいわゆる雑書体について、書体の用例を添えて解説した書物。空海が唐から日本へ伝えたと考えられている。

写真は、文亀3（1503）年に三条西実隆が世尊寺行季に書写させたもの。

所蔵／人間文化研究機構国立国語研究所

（812）年に、狸毛を使って仕上げた真書（楷書）、行書、草書、写書（写経）に用いる4種の筆を、空海が嵯峨天皇に献上した時に添えられた上表文の一部である。

筆生坂名井清川をして造り得て奉進せしむ。空海、海西において聴き見しところかくのごとし。（中略）毛を簡ぶの法、紙を纏うの要、墨を染めて蔵め用うること、ならびにみな伝え授け訖んぬ。空海、自家にして試みに新作のものを看るに、唐家に減らず。

〈筆職人の坂名井清川に筆を作らせて献上いたします。私が唐の国で見聞きした筆は、このようなものでございました。（中略）毛を選ぶ方法、紙を巻いて筆の穂を整える方法、墨をしみ込ませて穂を固める方法、すべて清川に伝授し終わっております。私も新たに出来上がってきた筆を拝見しましたが、唐の筆に劣らぬほどのよい仕上がりです。〉

空海が日本に伝えた、充実した「技術」の一端を、この一節から垣間見ることができる。

なお空海は、曼荼羅をはじめとする多くの密教絵画も請来したが、それらの修復や新調にも携わっている。また、仏像を造立することもあった。空海が、絵画、彫刻、鋳造など、多種多様な芸術を日本に伝えた立役者であったことも、書き添えておこう。

社会事業

空海がおこなった社会事業として最も人口に膾炙しているのは、満濃池の修築であろう。年間を通じて降水量が少なく、大河の流れていない讃岐平野では、灌漑用の溜池が大きな役割を担ってきた。空海の故郷である多度郡からも近い満濃池は、大宝年間（701～704）に造られたが、堤防が決壊して修復がままならない状況にあった。そこで、白羽の矢を立てられたのが、カリスマ性とマルチな才能を備えた空海であった。

讃岐の国司の発議によって、朝廷は官符を下して空海を満濃池修築の別当（責任者）に任命した。空海の徳を慕って多くの民衆が協力し、その工事は異例の速さで完了したと伝えられている。『日本紀略』が記録するところによれば、民衆は空海を父母のように慕い、空海が来ると聞けば、履物も履かずに迎えに出たという。

アーチ状の堤防や余水吐を施設するなどの、修築に用いられた土木に関する知識を、空海が唐で学んだとする伝承もあるが、それを証明する史料は、残念ながらわれわれに与えられていない。

なお空海が、教育制度を唐に倣って導入したことは、確実である。

空海は晩年になって、綜芸種智院という私立学校を開設したが、その教育理念を綴った「綜芸種智院の式」には、次のような記述がある。

大唐の域には、坊坊に閭塾を置いて普く童稚を教え、県県に郷学を開いて広く青衿を導く。（中略）今、この華城にはただ一の大学のみあって閭塾あることなし。この故に貧賤の子弟、津を問うにところなく、遠方の好事、往還するに疲れ多し。今、この一院を建てて、普く瞳矇を済わん。

〈大唐の都城では、坊ごとに勉学を教える塾があって、もれなく子供たちを教えており、県ごとに地方の学校が開かれていて、広く学生を教えている。（中略）今日、平安京には大学がただ一校あるのみで、勉学を教える塾は皆無である。このため、貧しい家庭の子弟には学問する方法がなく、学問を好む遠方の子弟は、通学に疲れ果てる始末である。そこで今、この綜芸種智院を建てて、すべての学童を救済しよう。〉

綜芸種智院は、仏、儒、道の三教を教えたため「三教院」とも呼ばれ、日本初の総合大学とも評されている。また、身分や経済力に関係なく門戸が開かれており、教師と学生の生活を保障する完全給付制が敷かれていた。

満濃池

香川県仲多度郡にある貯水量1,540万tの大規模な溜池。弘仁9（818）年に決壊し、それから3年後に空海によって修復された。

写真提供／PIXTA

ただ、その経営の実際については不明な点が多いのも事実であり、嵯峨天皇の皇后であった橘嘉智子の義兄、藤原三守によって土地と建物が寄進されたことのみが知られている。

空海が用いた翻訳技法

さて、本誌のテーマである「文化の翻訳」あるいは「思想の翻訳」ということに触れねばならない。

密教の法は、一つの容器から他の容器へ水を移し替えるように、師から弟子へ、そっくりそのまま伝えられるべきものであるとされている。そのため、空海が密教の教理自体に大きな変化を加えることはなかった。

ただ、空海が晩年に提唱した「十住心思想」では、既存の仏教の諸宗派から、インドや中国の諸宗教に至るまでを、密教を最高位に置いて十の階級に格付けしながらも、それらはすべて、密教の教主である大日如来が説いた教えであるとして、相互に主体となり得ることを認めている。これは、曼荼羅に象徴される密教の包摂主義に即したものであるが、日本人の宗教に対する寛容性にも通ずる。周知のように、日本人は古来、カミとホトケを分け隔てなく崇めてきた。

また、インド仏教の伝統では、心のある人間や動物を「有情」、心のない植物や無機物を「非情」として明確に区別するが、空海は「毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同じく平等の仏性を鑒みて」（「式部笠丞がための願文」）と述べて、毛や鱗、角、蹄や尻尾のある種々の動物たちのみならず、植物やモノもまた、宇宙仏たる大日如来の現れであると主張している。これもまた、山川草木に八百万の神々が宿ると考えた日本人の思考に合致するものである。

ここで、空海がおこなった「翻訳」の一例として、東寺（教王護国寺）講堂の仏像群を挙げておこう。

京都のシンボルでもある高さ55メートルの五重塔を有する東寺は、真言宗の総本山である。その広大な境内の中央に建つ講堂の内部には、空海の構想に基づいて造られた、21体からなる仏像群が安置されており、火災を被って復元された数体以外は、すべて国宝に指定されている。

21体の仏像のうち、向かって左側には、いずれも忿怒の表情をして蛇や髑髏の装身具を身に着け、真っ赤な火炎を背負った、おどろおどろしい姿の五大明王と呼ばれる5体の密教仏が並んでいる。これらは、空海が本邦に初めて伝えた尊像であり、その迫力が、平安の人々をさぞかし驚かせたであろうことは想像に難くない。そしてその右側（中央）には、柔和で凛とした5体の如来像が並び、さらにその右側には、慈悲に満ちた5体の菩薩像が並ぶ。

五大明王に代表される明王と称される仏たちは、強情で気性の荒い難化の衆生たちを叱咤し、力ずくで悟りの世界へ導くために、如来や菩薩が方便として現した姿である。空海は、如来、菩薩、明王、それら三様の姿を仏像に刻み、並列させることによって、密教の思想を目に見えるかたちで、具体的に示した――「翻訳」した――のである。

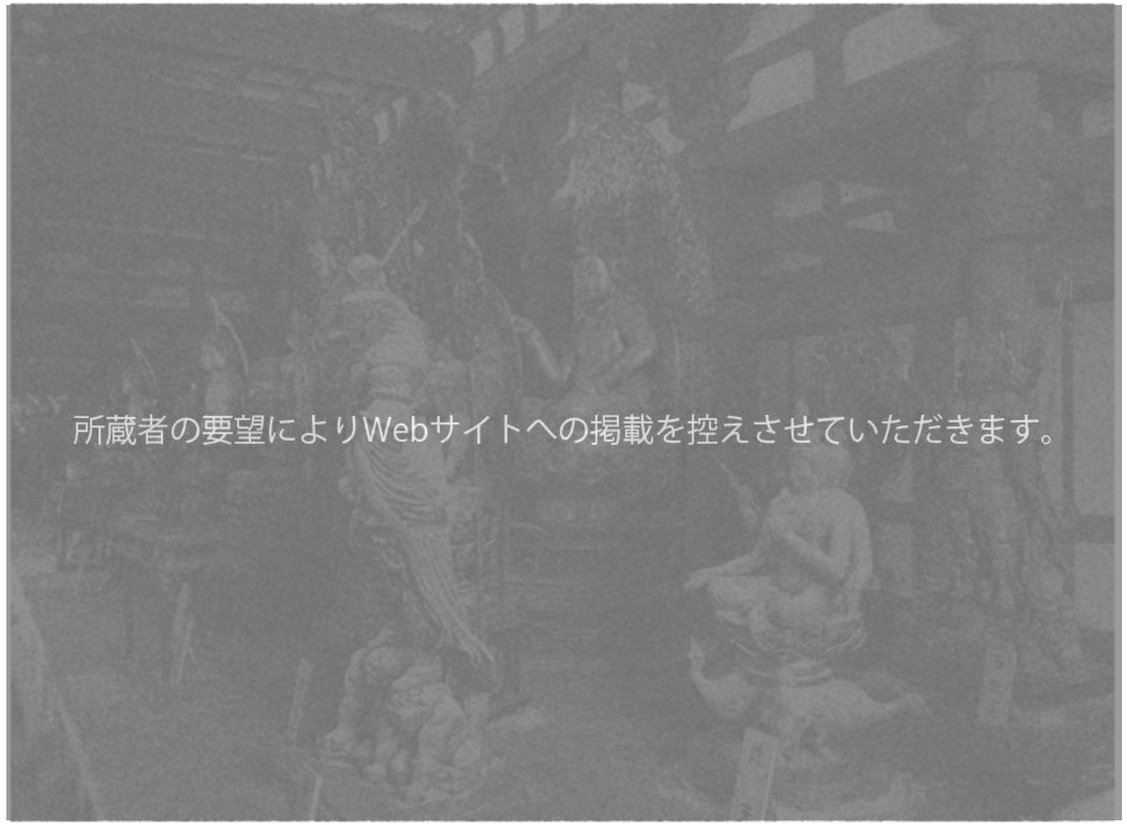
書の技法にしろ、芸術や土木の技術にしろ、理論の移入のみに留まるのではなく、目に見えるかたちで、実践をともなうのが、空海が用いた文化や思想の「翻訳技法」の特徴であり、強みであるといえよう。

＊　＊　＊

真言密教の教えを日本へ移植することに成功したのみならず、日本史上最大の「文化功労者」として、今もなお多くの人々から崇められている空海。そのバイタリティーの根源が何であったのかを示す次の一文を挙げて、拙稿を閉じることにしよう。空海が最晩年に高野山において催した「万燈会」の法要における願文からの抜粋である。

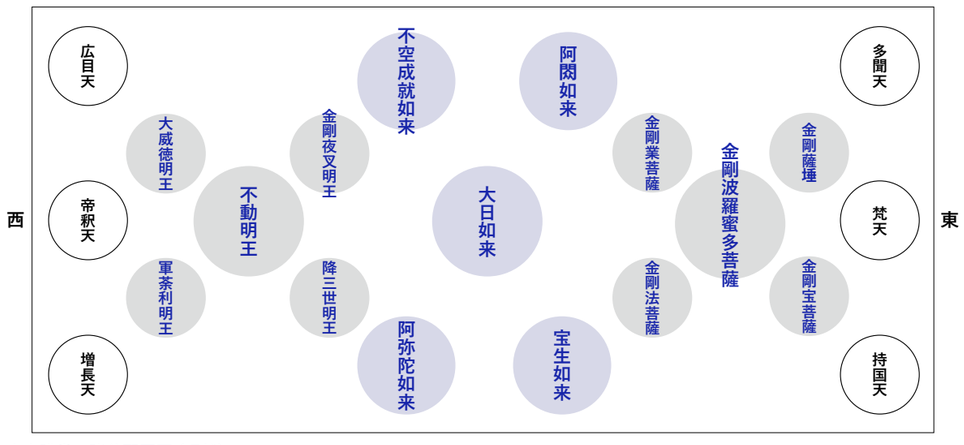
虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん。

〈宇宙空間がある限り、生きとし生けるものがある限り、すべての生命の幸福を実現するという私の願いも、永遠に尽きることはない。〉



東寺講堂の仏像群

密教の思想を可視化するために空海が考案した仏像群。
造像の背景には、「国家を安定させ、すべての生命の幸福を実現する」という空海の熱き思いがあった。
写真提供／高野晃輔



東寺講堂の諸尊配置図（現状）

向かって左（西）から、明王、如来、菩薩が5体ずつ配置されている。立体曼荼羅とも称される。
四隅からは四天王、左右（東西）の端からはバラモン教起源の帝釈天と梵天が、中央の仏たちを守護する。

近世の公用交通路と情報の伝達

電話やインターネットなどの近代的な情報通信手段をもたない近世において、情報流通は幕府の整備した公用交通路を利用しておこなわれ、政治のみならず商業や文化の情報をも伝播していった。近世の公用交通路の成立と情報の伝達の様子をたどり、情報通信手段が発達した現在においても学びうる視点を探る。

丸山雍成 Maruyama Yasunari

まるやま・やすなり
1933年、熊本県生まれ。歴史学者。九州大学名誉教授。専門は日本近世史、交通史。日本学士院賞受賞。主な著書に『近世宿駅の基礎的研究』『日本近世交通史の研究』『封建制下の社会と交通』『邪馬台国魏使が歩いた道』『参勤交代』など。

一　近世の公用交通路

◉家康による街道の整備と在町宿駅の発展

ここで近世を、織豊政権の安土・桃山時代と徳川政権の江戸時代とを合わせたものとするならば、公用交通路の体系も、前代のそれの延長線上にあるとはいえ、大幅な連続的改変による発展と見なければならないだろう。天下統一をめざす織田信長、その実現者であった豊臣秀吉は、これまでの戦国大名の領国かぎりの交通体系（伝馬制［＊1］に代表される）を大きく全国的なものに拡張させた。しかし、それは依然として、古代以来の伝統的な京畿中心の交通体系の枠組から外れるものではなかった。

これを突きくずしたのが、徳川家康である。彼は天正18（1590）年秀吉の転封策をうけて、江戸中心の関東領国経営に専心することになるが、それは後の五街道の原型を形成する時期でもあった。まず、関東領国の境界には、東海道の箱根、中山道の碓氷、奥州街道（のちに日光道中も）の栗橋、甲州街道（のち甲州道中）の小仏など重要関所が配置され、領国内の各街道宿駅も江戸～各関所間で創出、整備されていった。

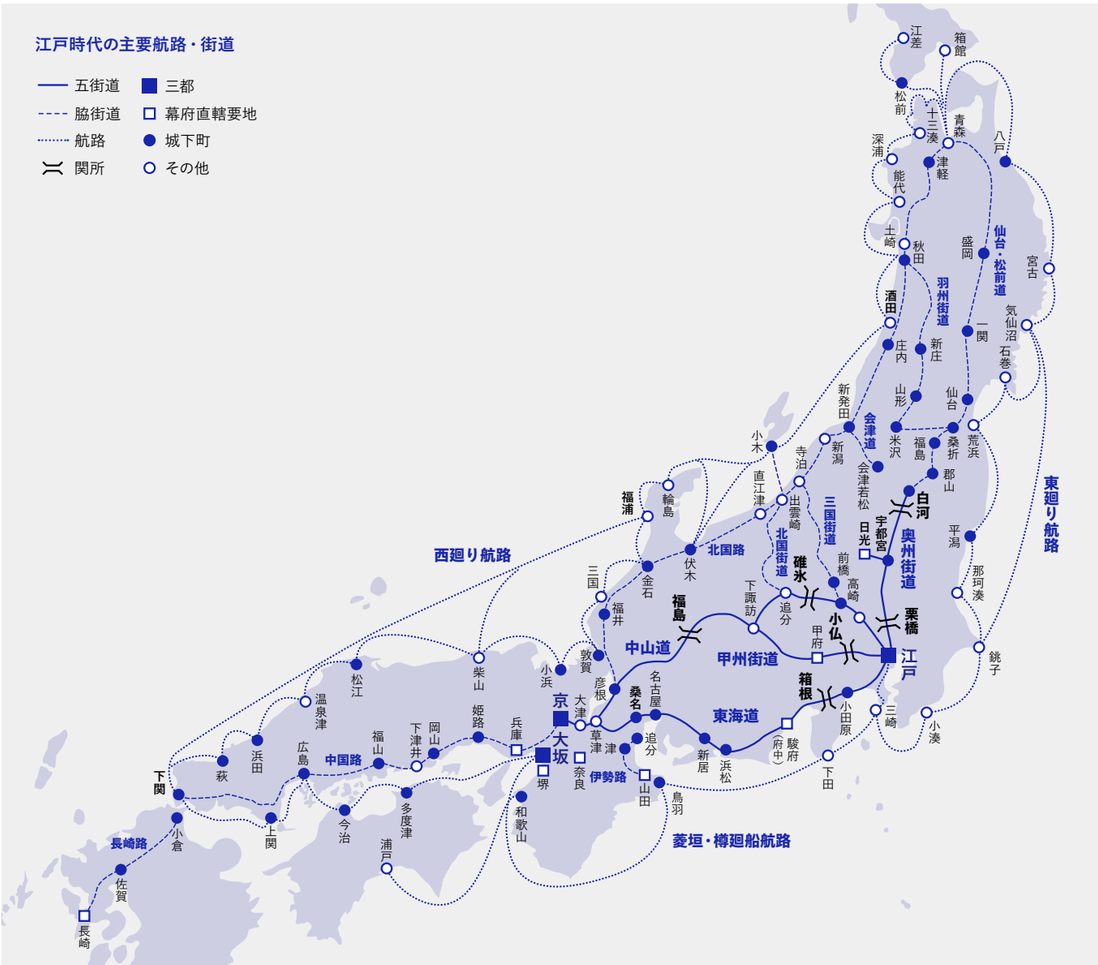
これは秀吉の没後、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦を経て、大きく変貌する。東海道はその翌6年、京都まで延長されて東海道宿駅（伝馬）制の実施を見（のち五十三次）、中山道も同七年に東海道草津まで延び（のち六十七次）、奥州街道は宇都宮から白河へ（のち奥州道中）と日光鉢石へ（のち日光道中）、さらに甲州街道も同九年以降は上諏訪へと延長された。また、関所も東海道は荒井（今切）、新居）、中山道は木曽福島というふうに、徳川勢力圏の拡大とともに配置範囲がひろがり、元和元（1615）年の大坂夏の陣後は、東海道は徳川氏の所領となった大坂城下まで延長され（五十七次）、幕府の関所も畿内近傍まで増加する。

こうして、五街道は本州中央部に拡伸し、それ以外の脇街道も五街道の付属街道に編入されるものが相ついだ。東海道には佐屋路（熱田～桑名）・本坂通（浜松～御油）、中山道には美濃路（熱田～垂井）、日光道中に例幣使道（今市～中山道倉賀野）・壬生通（小山～今市）・日光御成道（幸手～本郷追分）・水戸佐倉道（千住～八幡、松戸）が付属した。近世後期には、東海道伏見と中国路西宮とを結ぶ脇街道の山崎道以下も、付属街道に格上げされる。

五街道とその付属街道は、人馬継立（伝馬役）の負担面で、それぞれの宿駅やこれを補完する都市の助町［＊2］と郷村の助郷［＊3］とを包摂した、本州中央部の広域地帯をはしる幹枝の道であった。それだけに、江戸幕府の大目付（大名監察）と勘定奉行（財政担当）とを兼任する道中奉行が、交通関係の行政名目でストレートに在地支配する、地政上でも最重要の地域である。それは幕府権力が、これら広域の街道宿駅・郷村とその住民を、在地権力（大名・旗本ほか）の掣肘を排除して直接支配する場だったからである。ここには天領・譜代藩・親藩を配置し、要衝の地点には各城下町・関所・口留番所［＊4］以下をおくなど、単なる交通機能にかぎらず、政治・軍事・経済・情報の諸機能を十全に発揮できるよう配慮されていた。

五街道・付属街道の延長線上か、その途中で分岐する広義の幹線を脇街道とか脇往還と呼び、それよりさらに分岐する中・小道を脇道、横道などという。その代表的なものに、東海道の終着地大坂の延長上には中国路と長崎路（西国路）が、また奥州道中白河の延長として奥州街道（仙台・松前道）がある。これらは脇街道でありながら、幕府が全国支配を実現・維持する上での、日本列島（蝦夷地～本州～九州）上の最重要幹線（天下道）であった。このほかにも本州には、幕府が佐渡金山と連絡するための佐渡路（会津道・三国街道・北国街道）や羽州街道・北国路・伊勢路その他があり、四国・九州でも主な脇街道とその分岐道があった。

こうした主な脇街道の線上に点在する領国的な大藩では、城下町中心の「ミニ五街道」的な幾筋かの脇道、そこに並ぶ在町宿駅［＊5］群が放射状ないし網の目状を呈し、それが藩領域市場の成立を促進するかたちで、地域色豊かな藩社会をつくり出していた。ここでは、脇街道の宿駅機能のひとつ人馬継立業務も、「天下送り」（幕府関係の運送）と「御国送り」（藩の役人や財貨の運送）とで構成され、これを在地権力が管掌した。それは幕府権力にとって、街道コースの変更や人馬賃銭の許認可権のみを勘定奉行がにぎり、そのほかは関与しないという間接支配でもあった。もっとも、右の許認可権の行使を通じて遠隔地の外様大藩の財政支出などを遠隔操作できたことは、幕藩制国家の支配構造と特質をよく示すものである。このように見れば、五街道・脇街道とも公用交通路そのものであり、そこでの私用交通は当初これに付随するものであった。



◉幕府の海運政策と商品・情報の流通

近世の水上交通には、海上・河川・湖上の各交通があげられるが、このうち海上交通は「鎖国」制の下、日本列島の沿岸海運が中心で、大坂・江戸の二元的海運が展開したといわれる。それは幕府城米・大名蔵米などの大坂・江戸への海上輸送を全国的規模で発達させたが、そこには陸地の中小都市（城下町・陣屋町［＊6］・在町宿駅）や港湾都市と、三都（大坂・京都・江戸）とを結ぶ商品流通や情報伝達などの一大ネットワークが形成、機能するようになったからである。

こうした海運の発展に寄与したのが、江戸幕府の海運政策である。河村瑞賢［＊7］は、その下命により寛文10（1670）年東廻り海運（出羽～津軽海峡～房総半島～江戸）、同十二年には西廻り海運（出羽～下関～瀬戸内海～大坂～紀伊半島～遠州灘～相模灘～江戸）を刷新して、幕領米の江戸直送をはかったが、これは諸大名の蔵米輸送はもとより一般的な商品輸送体系にまで大きな影響をおよぼした。特に、江戸～大坂間の太平洋側では、生活必需品などの輸送から出発した菱垣廻船［＊8］や酒荷専用の樽廻船も、江戸十組問屋［＊9］や大坂二十四組問屋［＊10］などの仲間結成とともに発展、変転をみた。他方、日本海側では、蝦夷地と大坂などを結ぶ北前船が活動したが、特に瀬戸内海は諸国の地廻り廻船が集中するところで、かつて幕府の城米や諸大名の蔵米および参勤交代の大名荷物の輸送引き受けから出発した民間の商船が、自己または委託荷物の販売目的を中心として、全国海運に雄飛するものも出現した。九州・四国や中国の瀬戸内海沿岸の大名は、参勤交代に藩船を利用することが多く、また民衆も海上乗合船で遠隔地旅行や社寺参詣をした。一方、東海道では、大名の参勤交代に熱田～桑名間の七里渡し、舞坂～新居間の今切の渡しは海路利用となるが、民衆もこれに乗船、また伊勢参詣には吉田城下の港津、から伊勢の川崎・大湊まで海路を利用する者も多かった。

関東平野の江戸城米や大名蔵米は、陸上輸送よりも多くは利根川・荒川などの川船によって搬入されたが、興味深いのは両川とも商品運送のほか、一般旅客を川船に乗せて江戸などへ運送したことである。これは街道宿駅への宿泊者を減少させるとの激しい反対もあり、夜船が多く用いられている。九州の豊後佐伯・臼杵藩主などは内陸部で川船のみを利用、肥後人吉藩主も当初は山路を日向灘へむかったりしたが、寛文5（1665）年同藩商人による急流の球磨川開削の成功後は、八代の不知火海まで川船でくだった。もちろん、これは商品流通兼用であり、川船においても政治・経済関係の情報交換は随時おこなわれた。

二　公用通行をめぐるネットワーク

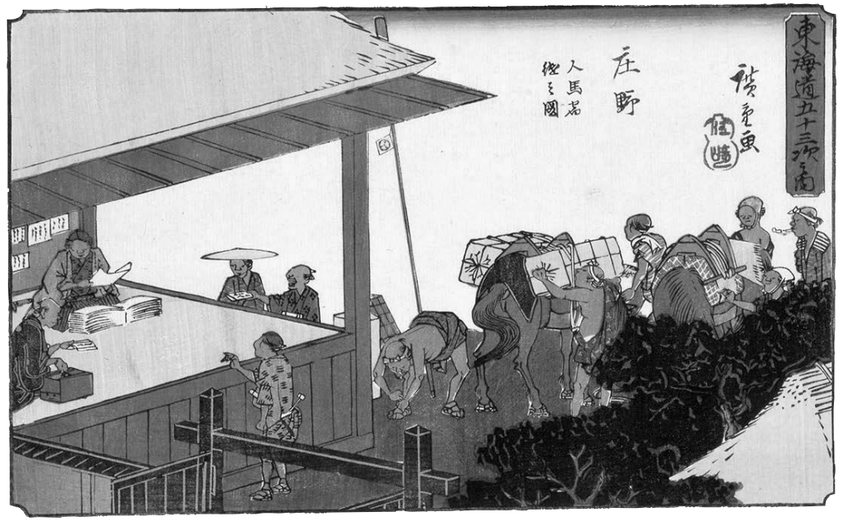
◉陸上交通路の主要通信手段――飛脚

一般に、陸上交通路における情報、特に通信機能は、飛脚や手旗信号、烽火（狼煙）によっておこなわれた。まず、織豊政権下、特に豊臣秀吉は、朝鮮侵略の本陣である肥前名護屋城と大坂・京都との通信・輸送路を確保するため、陸・海2コースの駅制を施行した。いわゆる継舟・継飛脚制の実施である。これらの継舟・継飛脚は、豊臣氏の奉行・舟奉行が現地近辺の船子・農民を使役して、逓送業務を遂行した。この継飛脚では1里につき2人を配したが、奥羽平定に先だち江戸～宇都宮間でも一里飛脚をおいたという。秀吉は、その朱印状［＊11］を一城ごとに将士に送付させたが、そのほか各宿駅にも逓送方を命じている。

この当時、京都では、御次（継）飛脚または馬借が御用飛脚業をつとめたが、大坂・奈良・大津・丹波・越前・加賀・伊勢・姫路・高野・敦賀・美濃・播磨を冠称する各飛脚業者が京都中心に形成されたようで、これを徳川政権下の飛脚業者の先蹤とみる説もある。もっとも、徳川家康の関東入国を始源とする江戸幕府の継飛脚は、関ヶ原の戦後の五街道宿駅制のなかに包摂されているが、寛永10（1633）年の継飛脚給米の各宿駅への下付を契機として制度的に確立した。それは将軍の朱印状や、幕府の老中・道中奉行その他の役職者の証文による御用状を沿道の町・村、後には宿駅が順次逓送するもので、この範囲は江戸を中心に京都・大坂・駿府以下、西は長崎、北は蝦夷地にまでおよぶ。この場合、宿駅の問屋・名主・本陣宅などが御継所となり、問屋ら宿役人が零細貧困な人足に継飛脚の仕事を請け負わせて、御状箱持・御書飛脚・飛脚番等々と呼び、諸用経費は継飛脚給米をあてた。これには大急御用・中急御用・常躰の別があり、江戸～京都間を最急便が2日半～3日、4日・5日で走行、幕府は渡河優先・夜通し継立・夜間関所通過などの特権をあたえている。

これに対して、諸大名は参勤交代制の下、江戸の藩邸、大坂の蔵屋敷、封地の居城や領内各地との連絡を密にするため独自の飛脚をおいた。このうち名古屋・和歌山・福井・津山・松江・高松・川越・姫路など御三家以下の親藩が本国～江戸間を連絡するものを七里飛脚と呼ぶ（うち、姫路は譜代藩で特例）。例えば、名古屋藩の場合、名古屋～江戸間に御継所18ヵ所を7里ごとに設け、下級藩士の中間3人ずつを配置して、藩用の御用状・荷物などの逓送にあたらせた。一般的な大名飛脚の例では、鳥取藩の場合、江戸～鳥取間を往復する御飛脚、参勤交代の大名行列より江戸・鳥取へ報知する御道中飛脚、鳥取・倉吉・米子その他へ連絡する領内飛脚があるが、これは他藩とも共通していた。福岡藩では、足軽2人が1組となり、江戸～福岡間を10～11日（大早）便・13日便・15日便で連絡している。

町飛脚は、江戸の定飛脚、京都の順番飛脚、大坂の三度飛脚が有名で、寛永19（1642）年江戸・京都の町人が申しあわせて10里ごとに飛脚宿を定めて運用し、大坂の飛脚が江戸へ進出したのも寛永年間だという。もっとも、その成立は、先



東海道五十三次之内 庄野人馬宿継之図
歌川広重画
庄野宿の問屋場の様子。帳付役が書類を確認し、馬士・人足たちが荷物を新しい馬に積み替えている。
所蔵／中山道広重美術館

東海道五十三次之内 平塚 縄手道
歌川広重画
平塚宿近くの東海道の縄手道（田の間の道）を目的地へ急ぐ早飛脚などが行き交う。
所蔵／知足美術館

の豊臣政権のときの京都・大坂以下、各地の飛脚業者の通信網が先蹤だったようで、これが三都のそれを中心に発達、各地方との関係を深めたとみるべきだろう。このうち、定飛脚問屋は、寛文4（1664）年京都二条城・大坂城内の各番衆が、これまで江戸へ月三度往復させてきた三度飛脚を請け負い、「御用飛脚」の名目で宿駅人馬の提供をうけて、城番衆以外の一般商用の分をふくめた飛脚として、経営を独立させた。18世紀ごろの三度飛脚仲間は江戸・京都・大坂に31軒の問屋を数え、東海道などには飛脚取次所がおかれた。

定飛脚問屋の著名なものに、大坂屋・十七屋・伏見屋・和泉屋・京屋・嶋屋などがある。その支店網は、後二者の例のように生糸・絹織物の生産地、上野・下野・甲斐から奥州におよんだが、さらに北は箱館、南は長崎など全国に拡大し、書状・現金・為替・荷物などを逓送、現代の郵便局の前身的役割を果たすようになる。また、大名家に出入りして用達をし、参勤交代時の荷物運送の人足を提供するものに、通日雇請負人がおり、その仲間を江戸上下飛脚六組（上下飛脚屋）と呼んだ。これは定飛脚問屋へ飛脚を提供する下請的存在だったのが独立したもので、当然ながら定飛脚と紛争を生じた。飛脚のなかには、かわら版を出したり、米相場を報知したりする者、遊郭などと関係のある文使や町使などがいたりし、飛脚が情報通信に果たした役割は大きい。

●「鎖国」下の海外情報収集

「鎖国」体制下の幕府にとって、海外情報に大きな関心が払われたのは当然である。その代表が、長崎出島から発せられる『阿蘭陀風説書』で、これはヨーロッパ・インド（ジャカルタをふくむ）・中国の各風説の3部からなるが、それ以外の世界の多岐にわたる情報もふくまれる。近世末期には、定型化されない『別段風説書』、それに唐通詞［＊12］を媒介とする『唐風説書』も書かれたが、これらは通詞仲間などを経由して幕閣のほか諸大名・公家その他にひろまった。特に西南大名などは長崎の蔵屋敷に聞役［＊13］を配置して、国内外の情報収集に努めたが、江戸参府途中のオランダ商館長やその一行からも海外の知識や情報が知識人・民衆にもたらされ、また日本国内の諸情報がヨーロッパ諸国に伝播していった。

こうした情報伝達のルートは、陸上の主要街道（長崎路～中国路～東海道・中山道）の諸飛脚のみならず、海上航路（玄界灘～瀬戸内海）の飛脚船をも利用した。後者は、公私をとわず連絡に急を要するとき、日和・風向も無視して艪走と帆走を交えて急行するもので、瀬戸内海以外の各港津にも存在した。このほか、河川の小船による急便もみられる。異国船の接近・漂着などの際は、九州・四国・本州の海辺諸藩は、遠見番所［＊14］・津口番所・船番所・火立場（烽火台）などを設けて、藩庁へ報知させ、さらに大坂城代ないし江戸城へ連絡するのを常とした。

●大坂・堂島の米相場の影響

三都など巨大都市や中小都市（中小城下町・陣屋町ほか）、街道宿駅や主要な街村には高札が立てられ、幕府や諸大名の基本的な政令・禁制公布の場とされたが、これは政治支配を主眼とするものである。一方、巨大都市は全国的商品流通のセンターランド［＊15］でもあり、特に大坂は日本列島の各地から厖大な量の米穀以下の商品が諸大名の蔵屋敷などに集中する関係上、その経済的地位は著しく高まった。特に堂島には、元禄10（1697）年米市が移転してきた後、米会所も設けられるが、そこでの米相場の情報把握は、諸藩やその町人蔵元にとっても経済的死命にかかわる重大事であった。大坂近傍の城下町や宿駅・在町にとっても、これは無視できぬ問題であり、例えば宿駅本陣の宿帳などに、米穀その他の商品相場を明記し、一般旅籠屋や商店に周知させている。

安永4（1775）年大坂町奉行は、大坂三郷（北・南・天満の3組）と摂津・河内の郷村が幟を立てて種々の合図をし、米相場を他所へ伝えるのを禁じたが、後には商人の相模屋又市らに堂島米市場の営業を許可したとき飛脚利用を許可している。手旗信号は、例えば岡山藩などの場合、堂島を起点として、尼崎・六甲山・碇山・高取山・旗振山・国包・龍野・赤穂・熊山から岡山に設置されているが、同藩では藩主の参勤交代の際は、烽火で連絡した。赤間関（下関）でも大坂米市場へすべてを廻送せず、ここで米穀等の集散、取引をおこなったので、大坂米市場のそれとを烽火で伝達しあった。明治6（1873）年の広範かつ激しい筑前竹槍一揆も、その発端は米穀商人の烽火による米相場操作に対する疑惑、誤解に起因するといわれる。

なお、都市や在町宿駅は、その大小にかかわらず周辺地域（助町・助郷）の中枢である関係上、街道という「線」を通じて流入する全国各地の政治・社会などの諸情報や文化・思想などを深く摂取し、また他地域へ逆伝播させる「面」の拠点でもある。このため諸情報の、「線」を通じた各地点ごとの「面」への広範な浸透は、その逆作用とも相まち、在来の武士・民衆間にみる広義の諸格差に楔を打ちこみ、その変質と普遍化をもたらしながら、新しい次元の世界（明治維新）をうみ出す契機ともなった。

『摂津名所図会』
大坂・北中之島ほとりの各大名の蔵屋敷に、舟で運ばれた米穀を陸揚げして運び込む光景が描かれている。
所蔵／大阪市立図書館

注

＊1 公用旅行者などの貨客運送のために、人馬勤めに従事させる制度で、古代から近世を通じて存在した。
＊2 近世都市内の街道伝馬町の貨客運送に、人馬を補助的に提供する隣接の諸町。
＊3 近世の街道宿駅の貨客運送に、人馬を補助的に提供する郷村、またはその課役。
＊4 近世の幕府領や旗本・藩領の境界警備のため、旅人の出入りや物資の移出入を監視するための番所で、幕府の関所格に至らない地域的なもの。
＊5 法的には農村でありながら実質は町として商業活動も営んでいた集落を在町といい、宿駅業務も果たした。
＊6 近世の城主格でない1～2万石の小大名や交替寄合（旗本）の屋敷を中心に発達した小都市。
＊7 江戸時代の有力商人、海運・土木事業家（1618～99）。地方の米を江戸、大坂へ運ぶ東廻り・西廻り両海運の刷新と畿内治水の二大事業の功労者。
＊8 上方～江戸間を木綿・油・酒・紙など日常必要物資を輸送する廻船。船側垣立（かきだつ）部分の筋を菱形の格子に組んだことから、その名が付いた。
＊9 菱垣廻船の渡航危険を避けるために結成された江戸有力問屋の組織。
＊10 菱垣廻船で大坂から江戸へ積み送る商品の買次にあたった大坂側の江戸積み問屋仲間。
＊11 朱印を押した公的文書。中世には戦国大名が花押（書判）代わりに捺印したもの、近世では将軍専用の重要文書を指す。
＊12 近世の長崎における中国語の通訳官。長崎奉行所と中国人との間の外交・通商事務を担当。
＊13 近世の九州・中国の諸藩が、その家臣を長崎に派遣した情報収集役。
＊14 近世の内陸部の幕府関所や幕府領・藩領境の口留番所に付属した見張番所、日本列島海辺で異国船来航などを監視する見張番所を指す。
＊15 港などの後背地で、その経済活動を支える地域、内陸地。

木村兼葭堂のネットワークにみる知の交流

近世大坂が生んだ稀代の文人・町人学者として知られる木村兼葭堂。幼少期から絵画、詩文、本草学を学ぶ傍ら、長じて書画骨董を広く収集。その膨大なコレクションは全国に知られ、閲覧・情報交換のために訪れる人びととの交友範囲は多岐にわたった。江戸期大坂を中心に、一大サロンと文人ネットワークを築いた兼葭堂の足跡を辿り、いま学ぶべき知の交流のあり方を探る。

有坂道子
Arisaka Michiko

ありさか・みちこ
1969年生まれ。京都府立大学文学部史学科卒業。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。京都大学文学研究科助手を経て、現在、京都橘大学文学部教授。論文に「市井の蘭学――木村兼葭堂にみる」、「木村兼葭堂の交友と知識情報」、共著に『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人びと』（吉川弘文館）、共編著に『完本 兼葭堂日記』（藝華書院）がある。

はじめに

18世紀後半、「大坂を通る者で彼のことを知らない者はいない」といわれるほど、世に名前の通った風流好事の博物家がいた。北堀江の造り酒屋の主人、木村兼葭堂である。兼葭堂は博学多芸な文人で、本草・博物家、画家として知られるのみならず、書籍をはじめとするモノの収集と、際だって幅広い人脈を築き上げた人物として有名である。

彼は自筆日記を残していて、その日に会った人名を書き付けるシンプルな人名簿式日記であるが、現存する19年余分の日記には、約8500名、のべ4万人近い人名が記されている。多い時には一日に20人以上と会うこともあるような、積極的な交際である。

日記からうかがえる交遊範囲は、北は松前から南は薩摩種子島にいたるほぼ全国にわたっており、文人・知識人はもちろんのこと、大名や藩士、中国の画人・僧、オランダ商館長・商館医、朝鮮通信使まで含まれている。現代ではなかば忘れられてしまっている兼葭堂であるが、日記が示す交流の痕跡は、兼葭堂が当時の大坂において人的ネットワークの中心にいたことを示唆してくれる。兼葭堂はなぜこれほど多くの人と関わりを持ったのだろうか。そしてまた、どのような交流を結んでいたのだろうか。

彼の生涯を追うと、単なる興味本位の物好きではなく、学者からも一目置かれる存在であったことがみえてくる。兼葭堂という人物のあり方を通して、18世紀後半の知の交流について考えてみたい。

Ⅰ　兼葭堂と学芸

◉町人兼葭堂

はじめに、大坂の町に住む町人としての兼葭堂を紹介しておきたい。

兼葭堂は、元文元（1736）年、北堀江5丁目で酒造業を営む坪井屋に生まれた。時は8代将軍徳川吉宗の時代である。通称は吉右衛門、字は世粛、号は巽斎、自宅の居室につけた兼葭堂の堂号で知られている。現在、大阪市立中央図書館の南東角に「兼葭堂邸跡」の石碑が建つが、旧宅は正確にはそこよりも西へ100メートルほど行ったところにあった。

造り酒屋坪井屋の主人として、町年寄を20年あまりつとめたが、54歳の時に支配人に任せていた造酒が生産制限を超えたとしてとがめを受け、酒造道具を没収され町年寄の職を解かれてしまう。そのため、親交のあった伊勢長島藩主の誘いを受けて、一時長島藩領川尻村（現・三重県四日市市川尻町）へ引っ越した。しかし、まもなく帰坂して、以後は唐物の筆墨紙硯を扱う文房具商を営み、享和2（1802）年67歳で没した。

大坂商人として見ると、決して順風満帆に進んだ人生ではなかったが、学芸活動という視点で見ればまた別の見方ができる。次に兼葭堂の学芸交流の様子を見ていこう。

◉画家との交わり

兼葭堂は短い自伝を書いており、それによって彼の学芸に対する関心のありどころがあらましわかる。それによると、幼いころ体の弱かった兼葭堂が、まず関心を寄せたのは植物と画であった。

このうち画は、文事に理解のある父のもと、5、6歳のころに狩野派の大岡春卜から初歩を学び、ついで大和郡山の文人画家、柳沢淇園（柳里恭）に手本をもらって教えを受けた。春卜の影響を受けて唐画を志す一方、12歳のころに、長崎から大坂へやってきた画僧の鶴亭を通じて、中国の沈南蘋がもたらした新しい画風に触れることになった。写実的で濃密な花鳥画を得意とする沈南蘋の画風は、花鳥画の世界に大きな影響を与えて多くの南蘋派の画家を生み出すことになったが、兼葭堂は鶴亭によってはじめて京坂の地にもたらされたこの画風をいち早く知ったのである。さらに、翌年には京都で池大雅から山水画を学んでいる。兼葭堂より一回りほど年長の大雅とは、師弟以上の親しい関係で生涯交遊が続くことになった。

このように、兼葭堂は一流の画家に師事してさまざまなスタイルの画を学び取り、多くの画家との交流が生まれている。ちょうど兼葭堂が活動した時期は、大坂で文人画が成長する時期にあたっており、大坂画壇の画家をはじめ、次代をになう若い画家たちも兼葭堂と交わって刺激を受けている。

25歳の時に最晩年の兼葭堂と知り合った文人画家の田能村竹田もそのひとりであり、兼葭堂の画技を高く評価し、もし門下で学ぶことができていたなら、と残念がっている。竹田は、兼葭堂の人柄について「後進の者を推薦するのに言葉を惜しまず、才芸に見るべきところがある者にはかならず心を尽くして交わった」と述べ、兼葭堂が年の離れた若い人材とも対等に接していたことを伝えている。

画家との交流のなかでは、互いに作品を依頼したり贈答し合ったりすることがよく見受けられるが、紀州の文人画家の桑山玉洲は少し違った依頼をしている。兼葭堂にあてた書状のなかで「御預け申し上げ御座候拙画の筋は、先達て申し上げ候通り、いかほど下直（値）にても苦しからず候間、商人方へ残らず節前に遣わされ下さるべく候」、つまりどれだけ安くても良いから、預けておいた自分の作品を節供前までに商人へ売り払って欲しいと、売画の仲介を依頼しているのである。玉洲は、池大雅や兼葭堂との交友を通じて書画の品評とは何かを悟ったとも述べており、兼葭堂が所蔵する書画を見て眼を養ったことも知られる。一方の兼葭堂も、紀州桑名藩儒が所望ということで古琴を斡旋したが、取引が成立しないまま琴も返却されず、甚だ困った状況に陥った時、玉洲に書状を送って取り成しを依頼している。両者が画家という単純な接点を超えて互いを頼み、より深

木村兼葭堂肖像
谷文晁筆　重要文化財
江戸時代の文人画家・谷文晁が兼葭堂の没後、遺族に依頼されて描いたとされる肖像画。その楽しげな表情から温厚な人柄がうかがえる。
所蔵／大阪府教育委員会

花蝶之図
木村兼葭堂筆
紅葉した幹につるをからめて花が咲き、胡蝶が舞う。当時流行した南蘋派の影響を受けて描かれた作品。
所蔵／関西大学図書館

い関係でつながっていることが知られる。

◉混沌詩社

蒹葭堂は18、19歳のころに儒学者の片山北海に経書の読み方を学んだが、漢詩文を好んだ北海の影響を受けて23歳のころから蒹葭堂会という詩文読書の会を開くようになった。

18世紀は、儒学の世界で漢詩文を積極的に位置づける荻生徂徠の古文辞学が盛んになり、漢詩文が大きな流行を迎えた時期である。このころには、生活のゆとりと教養への興味を持つ人びとがしだいに増え、限られた知識人だけではなく、さまざまな身分や職業の人びとが詩文や書画など文人としての素養を身につけるようになっていった。作詩文を楽しむグループの活動も多く見られるようになり、蒹葭堂会もやがて片山北海を主宰とする混沌詩社に吸収され、さらに大きく展開していく。混沌詩社には医者、商人、儒学者、武士（多くは蔵屋敷役人）など多彩な顔ぶれが揃い、大坂を代表する詩社として広く知られるようになった。

のちに昌平坂学問所の教官となり寛政の三博士に数えられた尾藤二洲も、在坂時に混沌詩社に参加したひとりであるが、詩社の主宰である片山北海に関して面白い話が伝わっている。当時京都で有名な儒学者であった皆川淇園と大坂の片山北海と、どちらかに従学しようと考えた二洲は、まず皆川淇園の家を訪ねた。そうすると、淇園は門人が左右に居並ぶなか威儀を正して面会した。次に片山北海の家を訪ねたところ、門前で手拭いをかぶって薪を割っている男がおり、これがすなわち北海であった。二洲はついに北海を師に選んだ、という話である。これは北海が素朴で飾らない人であったことを教えてくれるが、見かけにこだわらず、実を大切にするということにつながっている。混沌詩社の活動も、自由な雰囲気のなかで漢詩文を作り、批評し合うものであり、身分の違いなく仲間としての親しいつきあいが結ばれていたことは大きな特徴である。

◉本草学の世界

蒹葭堂が早くから興味を向けたもうひとつに、植物があった。自宅で草木花樹を育てるほど好きだった植物への関心は、やがて本草学の世界へつながっていくことになる。

本草学とは、薬用となる植物や動物・鉱物を対象とする学問で、今で言う薬物学に近い。蒹葭堂は16歳で京都の本草学者、津島恒之進（如蘭）の門人となり、恒之進の没後は他の門人たちと書状を通じて知識を深め、さらに小野蘭山の門弟となって本格的な本草研究を進めるようになった。小野蘭山は、江戸時代後期の最も有名な京都の本草家で、幕府の招きによって71歳で江戸に下り、医学館で本草学を講義した人物である。

蒹葭堂が本草学の学びを深める上で大きな役割を果たしたのが、同門の仲間たちとの交流や各地の本草学者との情報交換であった。とりわけ重要な機会であったのは物産会である。津島恒之進がおこなっていた本草の会はまだ小さな集まりであったと思われるが、しだいに本草会・薬品会・物産会などと称し、さまざまな物産を持ち寄ってその真偽を見極め、有用性の有無を検討し、知識を交換する集まりが各地で開かれるようになった。物産会は本草や産物に関するさまざまな情報を得るチャンスであり、その交流は学派の別にかかわらず、各地の本草家や本草に興味を持つ者たちが広く加わるものだった。

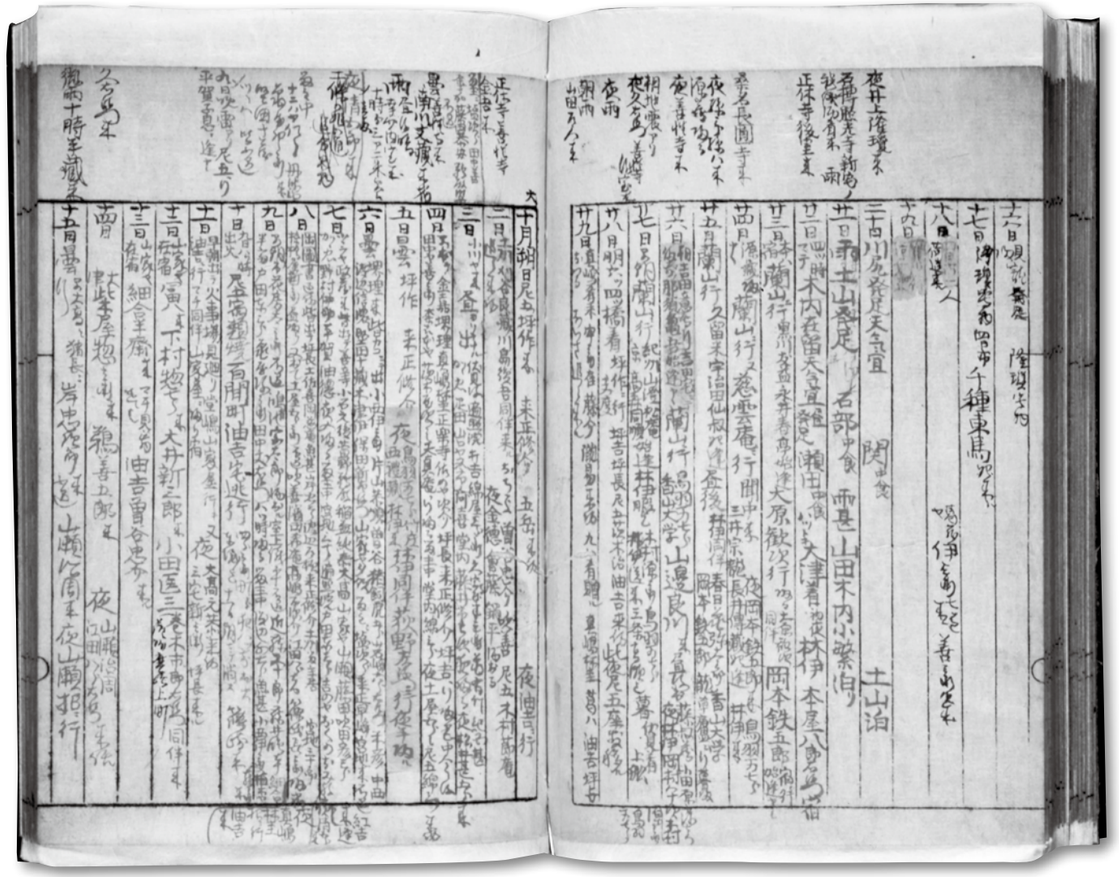
自伝のなかで蒹葭堂は、小野蘭山への従学を「蘭山に従て益名物のことを究む」と記しているが、「名物のこと」とはすなわち、植物をはじめとする諸物産の名前とそれが持つ性質を知ることである。たとえば外国産のある薬草にどのような形状・性質・効用があり、それが日本の何に当たるかを調べることが本草学では重要であった。そうした名物学の手法は、いわゆる薬物学の範囲にとどまらず、人間生活のまわりにあるさまざまな物産、モノへの関心へと広がっていくことになる。将軍吉宗が殖産興業に熱心で実学を奨励したことも、こうした動きの背景にある。物産会の盛行は、さまざまなモノに対する興味関心が多くの人に共有されていたことを示しており、対象とする物産を広げながら博物学的な方向へと進むひとつの流れを生み出すことになったのである。

Ⅱ　蒹葭堂の知のかたち

◉モノを考索する

蒹葭堂はそうした事物の考証をおこなうために、書籍や文物の収集に力を入れた。蔵書に関しては「数年来、百費を省き収むる所書籍に不足なし、過分と云うべし」というほどで、その数2万巻とも3万巻とも言われた。自伝にあげる収集対象は、書籍以外に、日本や中国の金石碑本、日本の古書画や詩文、中国書画、日本および外国の地図、草木・金石・珠玉・虫・魚介・鳥獣、古銭、古器物、中国の器具、外国の異産に及んでいる。

注目したいのは、そこに「奇を愛するに非ず、専ら考索の用とす」「右の類ありといえどもみな考索の用とす、他の艶飾の比にあらず」と書き添えられていることである。こうした物集めは金持



蒹葭堂日記
羽間文庫本
蒹葭堂が来訪者や訪問先を記した日記。日々びっしりと書き込まれた記述から、蒹葭堂の圧倒的な交友関係の広さがうかがえる。
所蔵／大阪歴史博物館

ちの収集趣味と思われがちで、実際、蒹葭堂も世間から「豪家の徒」と見なされることがあった。しかし蒹葭堂が強調するように、これらの蔵書や収集品を「考索」のために活用していたことは確かで、その成果の一端は蒹葭堂の著作『一角纂考』に見ることができる。

『一角纂考』は、蒹葭堂が解毒万能薬として珍重されたウニコール（一角）の原料を確定した書である。当時、一角の原料については諸説あって定まっておらず、蒹葭堂は所蔵する和漢洋の蔵書を調べ、西洋書の『グリーンランド地方地理志』にある図と記述によって、一角が北氷洋に生息するクジラの仲間であるイッカクの歯牙から作られることを明らかにしたのである。この西洋書の記述を信頼した根拠は、他の諸書が伝聞に基づく記述ばかりであったのに対し、実際にその地を訪れ、イッカクを見た人の言に基づく記載であったからであった。こうした考え方は、大坂における学問態度の特徴でもある、自ら実践・経験するなかで物事の真実を見極めるという考え方に沿うものと言える。

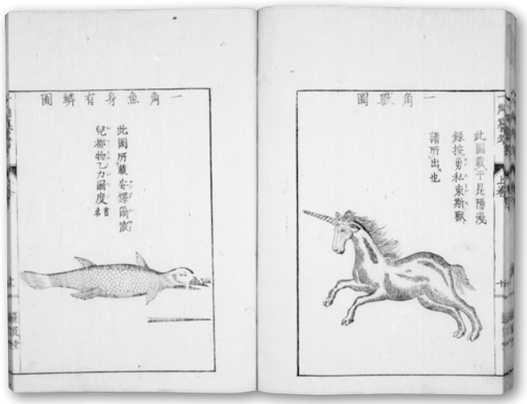
◉蒹葭堂の貢献

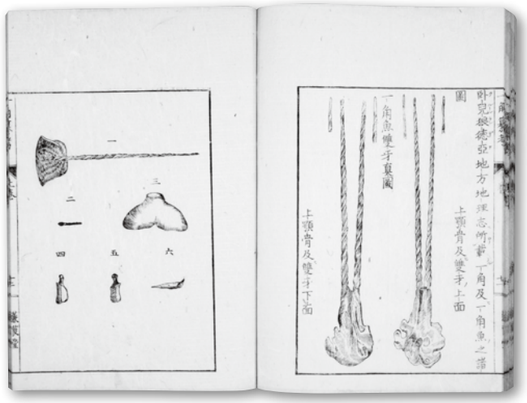
また、『一角纂考』は、江戸の蘭学者大槻玄沢の『六物新志』という著作と合わせて、蒹葭堂版、すなわち蒹葭堂の自費出版で刊行された。大槻玄沢は、『解体新書』で有名な杉田玄白に学び、はじめて蘭学塾を開いて多くの人材を育てた人物で、『六物新志』は一角やサフラン、ニクズクなど6つの薬物について解説した啓蒙書である。

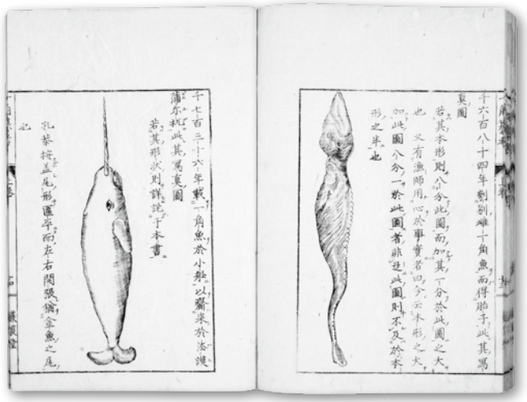
蒹葭堂は『一角纂考』をまとめるにあたり、大槻玄沢に意見を聞き、西洋書の記述の解読を依頼した経緯があり、たっての願いで玄沢の著述を合刻した。蘭学者の宇田川玄随は、蒹葭堂にあてた書状のなかで、「玄沢六物新志も、御世話にて刊行御図り下され候由、感荷（受けた恩を心に深く感じること）同様に存じ奉り候」と蒹葭堂に感謝の意を表している。

今も昔も専門書の出版は簡単ではなく、蒹葭堂は世の中に益するこうした成果を出版助成というかたちで援助した。蒹葭堂が自費出版した書は、自ら校訂・校注を加えた漢籍や知友の著書など二十数種にのぼり、価値ある書籍を吟味・選別して私財を投じて出版していることは注目に値する。

先にもあげた宇田川玄随の書状には、蘭学者の







『一角纂考』
木村蒹葭堂著　寛政7（1795）年刊　蒹葭堂蔵版
蒹葭堂の代表的著作で、クジラの一種であるイッカクについての研究書。大槻玄沢の『六物新志』とセットで刊行された。2段目の見開きの図が『グリーンランド地方地理志』からの引用。
所蔵／早稲田大学図書館

芝蘭堂新元会図
市川岳山画　重要文化財
寛政6（1794）年閏11月11日、洋暦の1795年の元日、江戸の蘭学者たちが大槻玄沢の居宅である芝蘭堂に集まり、いわゆる「おらんだ正月」を祝った時の様子。西洋式の祝宴の卓上にはナイフとフォークが並び、当時の蘭学者たちのサロンの様子を伝える。床の間の一角獣の絵は蒹葭堂からの贈り物だとする説もある。
所蔵／早稲田大学図書館

谷文晁書簡（部分）
文晁は旅先での見聞を蒹葭堂に伝えるべく、たびたび書状を送った。書簡中の人物画は浦賀で見かけた広東省の漂流民の姿を描いたもの。
所蔵／中尾松泉堂書店

間でも蒹葭堂の存在が噂になっており、蒹葭堂が徐々に考索の範囲を広げて蘭学にも及んできていることを江戸の蘭学者は「遙敬」していると言い、蒹葭堂の「発明」「卓論」「新説」などをぜひ聞かせてほしいと述べている。西洋書を含む豊富な蔵書を活用して考証する蒹葭堂の知識は、玄沢や玄随のような蘭学者が学説を立てていく上においても、有益で刺激に富むものであったことを教えてくれる。

◉秀でた収集力

蒹葭堂の膨大なコレクションは彼の収集力に支えられたものであったが、その積極的な収集活動を物語る次のようなエピソードがある。松前藩の役人が上方へ来た時に、松前にも入ってきていない蝦夷織物や蝦夷の産物などがかえって上方に多くあり、内々に調べたところ、それらの品々を引き受けている町人が木村吉右衛門、つまり蒹葭堂だったというのである。北方で交易された品が東回り航路で南部を経由して直接上方へ着船しており、蒹葭堂は北方の島々や異国への道筋・方角を詳しく描いた絵図も所持していて、松前藩の役人はこのような絵図が他国にあっては宜しくないので、いろいろ手段を講じて手に入れようとしたが、結局、蒹葭堂から入手することはできなかったという。

また、蒹葭堂は北方探検家として知られる最上徳内に、北海地図を見せてほしいと依頼してカラフト島の図を見せてもらっているのだが、徳内から、これは自分の手元から流布しては宜しくないので心得て見てほしい、と念押しされている。徳内はさらに、クナシリ・エトロフ・ウルップ3島とその先2島の図や、蘭学者の前野良沢が書いた『柬察加志』、ロシア人の描く北海図なども追って進覧すると述べており、蒹葭堂が非常にデリケートな情報も含めて、蝦夷地の情報に最も詳しい人物から直接情報を得ていることがわかる。

この二つの事例からだけでも、蒹葭堂がいかに旺盛な収集活動をしていたかを知り得るが、それは蒹葭堂の貪欲ともいえる知識欲、並外れた求知心を示すものでもある。

◉知識・情報の「互恵」

最上徳内の例が示すように、蒹葭堂のもとに集まる知識や情報は、友人・知人からのルートが重要であった。蒹葭堂の周辺は彼の興味関心をよく知っており、各地から蒹葭堂に情報を寄せている。

江戸の文人画家の谷文晁も、多くの文物や情報をもたらしており、蒹葭堂が好みそうなモノを贈ったり、旅先での見聞を書状で伝えたりしている。一通の書状のなかで多岐にわたることがらが書き込まれており、たとえばある時には、蒹葭堂へ唐山（中国）女服図、唐鳥図、慶安元年製の墨、古写本などを贈り、自分が見た宮本武蔵の「古松之鷲」の図や中国唐末の画巻に書かれた跋文について報告し、浦賀で見かけた広東省の漂流民の姿を絵に描いて送っている。逆に、蒹葭堂から文晁へは、書籍を贈ったり、法帖を貸したり、写本を調達するなどの便宜をはかっている。あわせて、共通の文人仲間の動向を伝え、言づてや荷物の受け渡しの依頼などもおこなっている。煩雑に思われるほどの内容であるが、考索、考証のためにはより多くの知識・情報が必要であり、蒹葭堂のもとには日々こうした新しい多くの情報が入ってきていたわけである。

と同時に、こうした知識・情報の収集が、互恵の関係に基づいている点にも注意しておきたい。一方的な依頼なのではなくて、相手の希望に応え、相手のために自分ができることを提供しあう関係である。蒹葭堂のコレクションは、互いの信頼に基づく互恵のあり方のなかで蓄積されてきたとも言えよう。

◉開かれた「知」

蒹葭堂には、自ら定めた「草堂規条」という決まりがある。そのなかで、自分が堂を設けたのは学術研究のためであり、蔵書は同好の人びとともに利用し、人に貸すことも厭わないと明記している。コレクターのなかには収集した書籍を秘匿し、見て楽しむだけの者も多いが、蒹葭堂は「（蔵書を）観玩の具と為すは余の慚じる所なり」と言い切る。また、装丁が美しいかそうでないかなどは問題でなく、ただ文字が鮮明かどうかだけを基準に書籍を集めたとも言っている。蔵書を学問に活用すること、それが蒹葭堂の集書の最も大切な目的であった。

そのため、蒹葭堂の蔵書・収蔵品を利用したいと願う多くの人が蒹葭堂を訪れた。蒹葭堂の書状に来訪者について記した一文があるが、「水戸儒臣立原甚五郎始め四五人、内々御用にて上坂有て、拙家収蔵の品とも書写の命も御座候、隣町に旅宿致され日々拙家へ過訪にて、書写致され候」とある。これは、水戸藩による『大日本史』の編纂事業のため、彰考館総裁の立原翠軒や画工の木村庄蔵らが、蒹葭堂が所蔵する古文書類を調査に来た際の様子を書いたものである。蒹葭堂の収集品の重要性が広く知られており、蒹葭堂がそれらを公開し、利用に供していたことを改めて確認できる。

この時に蒹葭堂と知り合った立原翠軒は、その後も交流を続けていた。2年後、蒹葭堂へ出した書状には、地図を借用していることに対する礼とともに、常陸の北海に現れた「異船」の情報を、知り得た船主・船員の挙動に触れながら詳しく報告している。両者の間にもまた、互恵の関係を見出すことができよう。

蒹葭堂の学芸活動の一番根底にあるのは、純粋な知への欲求であった。たしかに、蒹葭堂のあり方は特異ではある。しかし、蒹葭堂に顕著なように、18世紀後半の知識人たちは個人としての活動以上に「横のつながり」を大切にしている。交友によって結ばれたネットワークは、互恵の特徴をもちつつ、つねに双方向で情報のやりとりがなされ、それによってさらに強いつながりが生まれている。専門、立場、年齢、そうしたものを超えて人びとが結びつくところに、新しい知の発展の可能性が生まれてくるのではないだろうか。

「草堂規条」
自筆本『蒹葭堂記記』より。「草堂規条」には蒹葭堂蔵品の閲覧規則が記されている。
所蔵／辰馬考古資料館

創造性豊かな「民」の都市に花開いた大阪のデザイン

商業都市として栄えてきた大阪では、その商品の魅力を宣伝するための広告デザインも発展していく。明治から昭和初期にかけて、商業規模の拡大や新聞社の誕生などにより宣伝広告におけるデザインが一気に花開いた時代でもあった。「民」による創造性豊かなデザインは、現代だけでなく未来の都市づくりにも役立つのではないか。かつての大阪のデザインを通し考察していく。

井川啓
Ikawa Kei

いかわ・けい
㈱資生堂宣伝部を経て、IKAWA INTER DESIGN 主宰。京都光華女子大学短期大学部教授。東京アートディレクターズクラブ賞、朝日広告賞・電通広告賞入賞、日本印刷産業連合会会長賞、文化庁著作権制度100周年シンボルマークコンペ優勝など。

江戸時代の大坂に見る商いと宣伝

大阪は1868（明治元）年に大阪府が置かれるまで、大坂と書いていた。大坂は16世紀後半に開発が始まった後発都市でありながら、江戸時代には「天下の台所」として大いに発展を遂げることになる。これは、「問屋」という新たなビジネスの形態が生まれるなど、大坂でいくつかのイノベーションが起こったからだと言われている。

その時代の宣伝広告といえば、現代のチラシにあたる「引札」やポスターにあたる「絵びら」である。これらは、特定の人に限らず不特定多数の大衆の購買意欲を高めた。大坂では元気な者を市中に歩き回らせ、引札を撒かせたようだ。これらの者を「東西屋」と言い、我が国における広告業者の草分けと言える。「東西東西（とざいとうざい）……」の口上が呼び名の由来である。このように広く撒き散らすことを工夫した大坂では「引札」と言わず、その当時から「ちらし」と呼んでいたという説がある。多くの人に宣伝するのに、「引札」「ちらし」という媒体だけに頼らず、人のリアルな口上とを組み合わせた宣伝方法を活用したのは、大坂人らしい発想かもしれない。

呉服商から百貨店に繰り広げられた宣伝合戦

明治以降の商業の発展を象徴する業種として百貨店がある。百貨店は後の三越となる越後屋をはじめとして、もともとは呉服商であった。当時、呉服商の商売の仕方は客の家に商品を持って行く「出張販売」であった。それが、客に店まで足を運んでもらい、客の希望する商品を一つ一つ見せていく「座売り販売」となり、さらに多数の商品をあらかじめ飾っておく「陳列式販売」にかたちを変えていった。

1896（明治29）年に大阪の三井呉服店（後の三越呉服店）は、日本で初めて陳列販売を始めた。客に店舗まで足を運んでもらわないといけないので、情報の提供つまり宣伝広告も必要となり、この時すでに意匠部をつくっている。こうして、三越、髙島屋、大丸、松坂屋などの呉服店系に鉄道系の阪急、近鉄も加わり、昭和初期から戦後にかけて、各百貨店間で壮大な宣伝広告合戦を繰り広げた。

次に大阪の各百貨店がいかに他店と差別化した宣伝広告を展開したのか。また、それを手がけたデザイナーたちを見ていきたい。

◉髙島屋（高岡徳太郎・今竹七郎）

髙島屋の広告デザイナーとしては、まず、1926（大正15）年に宣伝部に入った高岡徳太郎の名前を挙げなければならない。もともと西洋画を学んだ高岡は、木版や筆による描写を試したあと、ペン画による女性を多く描いた。身体に対してやや大きめな丸顔の女性は、一目見て髙島屋の広告だと分かった。高岡の退社後、1931（昭和6）年に神戸大丸から移ってきた今竹七郎は明快な線で女性を描き、モダンなイメージを髙島屋の広告に持ち込んだ。今竹のデザインは当時最先端である図式化という手法を取り入れており、優れたデザイナーとしての資質を感じさせる。

◉大丸（森脇高行・柴田可寿馬）

在阪の百貨店において、近代的広告デザインをいち早く確立したのは大丸であった。これには、1925（大正14）年に入社した森脇高行が大きく貢献している。森脇は「ヴァニティ・フェア」や「アール・グ・ボテ」などの海外ファッション誌を手本に、線画による女性や商品を西洋風のモダンな構図でレイアウトした。大丸は心斎橋にヴォーリズ設計の本格的洋風店舗を新築しており、西洋風ということを企業イメージの柱にしていた。

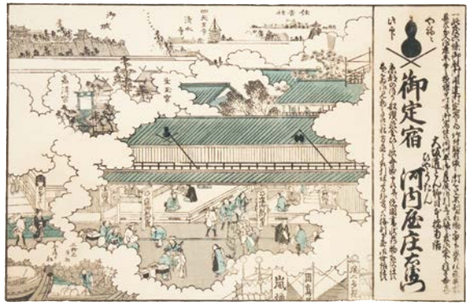
森脇は新聞広告をはじめ、ポスターやリーフレット、大丸のPR誌「だいまる」の表紙、そして、大阪商船のPR誌「海」に掲載する広告も制作した。

さらに、1928（昭和3）年には柴田可寿馬が入社し、女性のイラストをカットではなくシンボル的に扱うことを確立した。柴田の線には伸びやかさがあり、動的なポーズをとる人物をよく表現している。当時の新聞紙面には各百貨店広告がひしめき合っており、柴田の動的なイラストは他店との差別化を図る上で大きな力となった。

◉阪急百貨店（中島康雄・山城隆一）

阪急百貨店の新聞広告は、1929（昭和4）年の開店以来、電車の断面を飾り枠にし、マークを中央に配置する、鉄道会社という企業イメージを優先するかたちとなっていた。電車枠の中に文字だけの様式を酷評されることも多く、百貨店広告として洗練されるのは、戦後の中島康雄と山城隆一の登場を待たねばならなかった。

二人は共に図案科出身で、個別に作業することもあれば、絵は中島、文案とアートディレクションは山城といったような共同作業も行ったようだ。この頃には電車の飾り枠も簡素化され、ホワイトスペースを生かした洗練されたデザインになっている。掲載図版（44頁）は山城による新聞広告だが、広告するものから少し距離のあるキャッチコピーとイラストを使用することで、見る人を惹きつけ、本文で具体的な内容を伝えるという近代広告のスタイルを取り入れている。山城はこのあと東京に移り、日本の広告、グラフィックデザインの発展に大きく貢献することになる。



江戸時代の引札
南木コレクション「ひょうたん河内屋庄右衛門」
所蔵／大阪城天守閣

明治時代の絵びら
「桜嶋みはらし亭開業広告」
所蔵／大阪歴史博物館

大丸の新聞広告（デザイン／柴田可寿馬）
昭和13年6月26日大阪朝日新聞朝刊
資料提供／朝日新聞社

高島屋の新聞広告
（デザイン／今竹七郎）
昭和9年2月19日大阪朝日新聞朝刊
資料提供／朝日新聞社

近鉄百貨店の新聞広告（デザイン／早川良雄）
昭和26年9月11日毎日新聞夕刊
資料提供／毎日新聞大阪開発

阪急百貨店の新聞広告（デザイン／山城隆一）
昭和25年9月21日大阪日日新聞夕刊
資料提供／新日本海新聞社

◉近鉄百貨店（早川良雄）

近鉄百貨店の広告に携わった早川良雄は、1936（昭和11）年に三越百貨店に入社しウインドウディスプレイを担当していたが、大阪市役所文化課に転じて催事ポスターをつくっていた。

戦後、1948（昭和23）年に近鉄百貨店に入社した早川のデザインは、見る人が自由にイメージを膨らませ、感性をも刺激しえるような広告の新しい境地をつくり出した。この感性的な早川のデザインは、後進たちに大きな影響を与え、後に日本を代表するデザイナーとして登場する田中一光は、早川が手がけた近鉄電車の車内吊広告を見て、デザイナーへの夢を膨らませたと述懐している。また、早川は色彩感覚にも才覚を発揮し、ポスターの秀作を多く残している。こうして、同じ鉄道系の阪急、近鉄は、互いに意識し切磋琢磨しながら大阪の広告デザインを牽引していった。

日本の文化をリードした2大新聞社

百貨店の発展には新聞広告の役割が大きかったことに気づかされるが、1879（明治12）年に「朝日新聞」は大阪で創刊され、1882（明治15）年には毎日新聞の前身である「日本立憲政党新聞」も大阪で創刊されている。「朝日新聞」「毎日新聞」という日本を代表する新聞社が大阪で生まれたということを知らない人も多いのではないだろうか。両新聞社は大阪発行のものを「大阪朝日新聞」、東京発行を「東京朝日新聞」というように東西別々の新聞社として運営をした。

今に続く「天声人語」は1904（明治37）年に大阪朝日新聞で連載開始され、夕刊は1915（大正4）年に大阪朝日新聞が日本で初めて発行している。1927（昭和2）年に内務省が行った発行部数調査によれば、「大阪朝日新聞」が126万部、「大阪毎日新聞」が117万部で、東京で発行される「東京日日新聞」の45万部、「東京朝日新聞」の40万部を大きく上回り、まさに大阪は新聞王国であった。

大阪の二つの新聞社は、全国的なスポーツや文化活動に積極的に関わっている。現在の高校野球へと繋がる「全国中等学校優勝野球大会」を大阪朝日新聞社が主催し、1915（大正4）年に第1回を開催している。また、戦後に「毎日広告デザイン賞」となる「商業美術振興運動」を大阪毎日新聞社が主催し、1931（昭和6）年から大戦末期の1944（昭和19）年まで続けられた。これは、企業の新聞広告図案を中心に募集するもので、当時の図案家への登竜門になるものであった。このように「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」は、大阪の産業の発展に寄与しながら、日本の文化もリードしていた。しかし、太平洋戦争突入による統制政策により、朝日、毎日とも東西の新聞社が統一され、大阪の独自性は失われることとなる。

「大大阪」時代を導いた先見性のある都市デザイン

明治に入って大阪は商業都市から商工業都市へと発展し、やがて「大大阪」と呼ばれる時代を迎える。これには、近代都市の発展を見越した年間予算の20倍を使っての築港工事や、鉄道、街路整備などの先見的な都市計画が大きく寄与している。この計画は、關一（せきはじめ）（1873～1935）が中心となって策定された。

關は、東京高等商業学校（現・一橋大学）の教授から1914（大正3）年に大阪市の高級助役に招かれ、その後大阪市長に就任している。専門は、社会政策、都市政策であった。その都市計画の代表的なものに、御堂筋の拡幅工事（昭和12年完成）がある。わずか6mだった道幅を一挙に44mにしたのだ。最初は立ち退きに多くの市民から反発があったが、關は御堂筋の拡幅が大阪の発展のためにいかに有益であるかを説き、市民に理解を求めた。イチョウ並木を植え、電線はすべて地下に埋設した。沿道にはヴォーリズ設計の大丸百貨店や安井武雄設計の大阪瓦斯ビルなど先進的なビルが建ち並んだが、高さは100尺（約30m）に制限し、世界にも類をみないほどの美しい街並みを生んだ。以降、御堂筋が大阪のシンボルとして市民に愛されていることは言うまでもない。

これに加え、御堂筋の地下に地下鉄道を敷設したことも關の残した偉業である。梅田～心斎橋が1933（昭和8）年に開通、1938（昭和13）年には天王寺まで延長した。地下鉄道としては東京に次ぐものだが、公営としては日本初である。各駅は天井を高くし、ホームも充分な長さを確保していた。その他、關が実施したものには、上下水道の整備、公営住宅の建設、公設市場の開設、大阪商科大学（現・大阪市立大学）の開校などがある。これら、關が構想した都市プランが「大大阪」時代の骨格をつくり、大阪は「東洋のマンチェスター」と称されるまでになった。

三人の卓越した経営者とブランドデザイン

大阪が発展した「大大阪」時代に、近代稀に見る卓越した三人の経営者が存在したことも忘れてはいけない。阪急の小林一三（いちぞう）、寿屋（現・サントリーホールディングス）の鳥井信治郎、松下電器製作所（現・パナソニック）の松下幸之助である。彼らの熱き志は、優れた商品づくり、宣伝活動など重要な企業精神として今も受け継がれている。

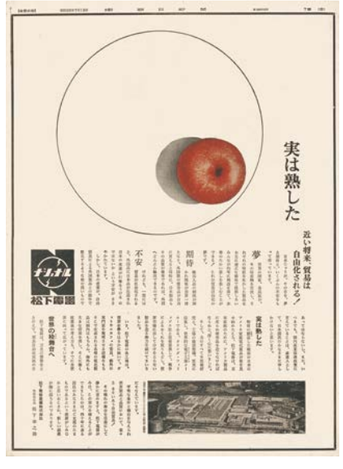
◉小林一三（1873～1957）

小林一三は、1907（明治40）年に阪鶴鉄道（現・JR福知山線）に入社後、「箕面有馬電気軌道」を設立し、間もなく経営の実権を握ることとなった。設立から3年後の1910（明治43）年に、現在の阪急宝塚線となる梅田～宝塚、箕面線の石橋～箕面を開通させた。

小林の経営者としての優れた功績は、起点ターミナルにデパートを、終点に動物園・遊園地・温泉などの娯楽施設を、沿線には住宅地をつくり、乗客数を確保するという、その後当たり前となった私鉄経営の基本スタイルをつくったことにある。「乗客は電車が創造する」とは小林の言葉である。沿線途中につくった「池田室町住宅地」では、日本で初めて住宅ローンを導入し、後に「宝塚歌劇団」となる「宝塚唱歌隊」をつくり専用劇場もつくるなど新しいアイデアを経営に生かしたのも小林ならではである。この確固たる経営思想の上に、ブランドデザインをしっかり構築している。マルーン色に統一された車輌の外装、木目をプリントした高級感のあるデコラ板を使用した内装、ご婦人の髪を巻き上げない上部から開く下降一段窓など、現在も続く阪急スタイルである。また、新聞広告の周りには電車の断面を模した飾りをつけ、電車が基本である経営姿勢を宣伝広告デザインにも明快に表現している。これらの一貫した企業理念は、沿線住民のほか多くの阪急信仰者を生んだ。

阪急百貨店包装紙
（昭和25～35年）
現在類似の復刻デザインにてグッズ展開などもされている
提供／阪急阪神百貨店

鳥井商店
「赤玉ポートワイン」
ポスター（明治40年）
もともとはモノクロでワインにのみ赤色に配色されていた
提供／サントリーホールディングス



松下電器産業
「実は熟した」新聞広告
朝日新聞（昭和35年7月13日）に1ページ全面掲載された
提供／パナソニック

◉鳥井信治郎（1879～1962）

鳥井は、「日本人の味覚に合った洋酒づくり」を目指し鳥井商店を開業し、1907（明治40）年に、甘味葡萄酒「赤玉ポートワイン（後の赤玉スイートワイン）」を発売した。商品のネーミング、ラベルデザイン、日本初のヌード写真を使ったポスターなどが話題になり大ヒット商品となった。「やってみなはれ、やってみなわからしまへんで」は、当時、未知の分野に挑戦しようとして周囲に反対されるたびに鳥井が発した言葉で、サントリーの企業マインドとなっている。

1921（大正10）年に株式会社寿屋を設立した鳥井は、日本人の味覚に合ったウイスキーをつくるということを目指し、1923（大正12）年に山崎蒸溜所を開設した。1929（昭和4）年、初の本格的ウイスキー サントリーウイスキー白札（後のホワイト）を発売し、新聞広告には「断じて舶来を要せず」と記した。1937（昭和12）年には、サントリーウイスキー角瓶を発売。鳥井は中味だけでなくボトルデザインにも日本らしい独自のものを求めた。出来上がった日本独自の亀甲紋をつけたボトルを見て、「亀は万年、この瓶は万年も残りまっせ」と鳥井は喜んだ。戦後すぐ、1946（昭和21）年にはトリスウイスキーを発売し、1958（昭和33）年に柳原良平がつくったアンクルトリスを宣伝キャラクターとして登場させた。当時、寿屋宣伝部には、柳原をはじめ、開高健、山口瞳らが在籍しており、彼らによる名作トリス広告シリーズが始まった。

◉松下幸之助（1894～1989）

松下は15歳の時に当時大阪で走り始めた市電を見て電気の将来性を感じ、大阪電灯に入り、ソケットの改良に取り組んでいた。1918（大正7）年に、西野田の借家で小型プレス機2台を入れ、妻と義弟（後に三洋電機を創業する井植歳男）とで松下電気器具製作所を創業した。幾度かの危機を乗り越え、アタッチメントプラグや2灯用差込プラグなどのヒット商品を世に送った。

1923（大正12）年には、従来の約10倍の寿命（30～40時間）の砲弾型ランプを発売したが、当時は電池式ランプの信用度は低く、扱ってくれる問屋はどこもなかった。そこで、「いいものは必ず売れる」という信念で小売店に無償で置いて回り、月に1万個売れるヒット商品になった。さらに1927（昭和2）年には、初めて「ナショナル」の商標を使った角形ランプを発売し、1929（昭和4）年には社名を松下電器製作所に改め、個人経営の町工場から社会も認める企業へと歩み出した。

1951（昭和26）年にアメリカを視察し、「これからはデザインの時代や」と帰国した羽田空港で語り、宣伝部のなかに製品意匠課を設置し、デザインという付加価値の活用を重要視した。こうして、松下は名実ともに日本を代表する家電メーカーとして君臨することとなった。

「官」に頼らない「民」の力が都市を蘇生させる

こうして見てくると、当時の大阪は、革新、創造、冒険のオンパレードだったことに気づく。そこには国の政策、いわゆる「官」の影は見えない。個人が自由に発想し、志を追求した当時の大阪の姿が目に浮かぶ。大阪の繁栄は「民」の力で勝ち取った。その創造性豊かな都市「大阪」にデザインの花が咲いた。デザインは、コンセプトが明快な志の上で輝きを放つ。企業家が熱き志を示し、デザイナーはその想いに乗ってクリエイティビティを発揮した。そのできたデザインを見て、また新たな発想を生む。当時の大阪は、都市全体が自由自在に変速する優れた変速機と、どんな悪路にもへこたれない強靭な動力を持ち合わせていたのではないだろうか。

「大大阪」時代の立役者である阪急の創業者小林一三は山梨出身、御堂筋をつくった大阪市長關一は静岡出身と、奇しくも二人とも生粋の大阪人ではなかった。この二人は生まれ故郷をひいきするという感情的なものではなく、大阪を俯瞰から客観的に見て事業に取り組んでいる。ゆえに、彼らが残した言葉はこれからの都市を考える上で重要なヒントを与えてくれるような気がする。小林は「あらゆる事業に国の政治が付きまとう東京に対し、大阪は政治と実業が分かれており、私も既成の概念にとらわれない自由な発想で事業を行う精神を見習いたい」と語っている。また、關は大阪の都市計画をする上で、「住み心地のよい都市をつくることこそが都市を永続的に繁栄させる条件だ」と語っている。「官」（国の支援）を頼るより、まず「民」で住みよい都市づくりを考えることが重要ではないか。

今後、日本は国全体の人口が減少するなか、高齢者人口の割合が増える。人口の少ない若年層の負担を考えれば、皆ができるだけ終身健康で自立する必要がある。また、就業力を補うために外国からの人員も求めなくてはならないであろう。このように考えると、多種多様な人が暮らしやすい都市づくりのためには「ユニバーサルデザイン」の考え方が重要である。手前味噌になるが、筆者は学生と「KYOTO ユニバーサルデザイン・ガイドマップ」をつくり街頭で配布したところ、大きな反響があり、分けてほしいという要望がひっきりなしに寄せられている。このガイドマップは和英併記で、皆に共通して必要な屋根付きバス停、タクシー乗場をはじめ、多目的トイレ、AED、さらに歩道幅なども掲載している。このような取り組みは、人々のニーズがあるのにもかかわらず、日本ではまだまだ進んでいない。ぜひ、これからの都市づくりに「ユニバーサルデザイン」を生かしてほしいと希望する。

しばしば、「東京一極集中」ということが現在の都市問題として取り上げられている。しかし、そこには「官」を頼るがために、それに代わる都市のあり方をイメージできない我々「民」の責任も大きいのではないか。「大大阪」時代を支えた「民」の創造力と実行力を見習い、日本の各都市が独自の文化を熟成しながら再び咲き誇ることを期待したい。

参考文献
『大阪の引札・絵びら――南木コレクション　江戸・明治のチラシ広告』（大阪引札研究会編、1992年、東方出版）
『岩手大学人文社会科学部研究紀要』第86号「引札に見る近世・近代の社会と文化」（樋口知志・佐藤友理、2010年、岩手大学人文社会科学部）
『関西モダンデザイン史――百貨店新聞広告を中心として』（宮島久雄、2009年、中央公論美術出版）
『水都大阪盛衰記』（大阪府立文化情報センター・新なにわ塾叢書企画委員会編著、2009年、ブレーンセンター）
『「民都」大阪対「帝都」東京』（原武史、1998年、講談社選書メチエ）

「KYOTO ユニバーサルデザイン・ガイドマップ」

シリーズ――2 ことばと交

方言分布が見せる「坂」「崖」「峰」

ことばは、人々が「交（まじ）わる」ための必要不可欠な道具であり、新たな交流が生まれる場所では、ことばそのものも変化していく。ことばから「ルネッサ」を導くシリーズ第2弾では、方言地理学の見地から、「坂」「崖」「峰」で表されることばの伝播の経緯とコミュニケーション言語のあり方をひもとき、ことばと人のつながりを考える。

大西拓一郎
Onishi Takuichiro

おおにし・たくいちろう
1963年生まれ。方言学者。現在、国立国語研究所教授。おもな著書に、『ことばの地理学』（大修館書店）、『現代方言の世界』『新日本言語地図』『空間と時間の中の方言』（いずれも朝倉書店）など。

■二都物語

「方言周圏論」というのをどこかで耳にしたことはないだろうか。都のことばが周辺に広がっていくことにより方言ができあがるという理論である。都からの新しいことばの放射は、何度も繰り返される。そのために方言の分布は同心円を描く、とされる。

都からの重層的な新語の放射と伝播は、都との言語の類似性を定量的に捉える場合、都からの距離との間の相関を示唆する。すなわち、都に近いほど類似性は高まり、遠いほど類似性は下がると想像される。

このことを具体的に検証してみよう。幸い、日本では『日本言語地図』『方言文法全国地図』『新日本言語地図』という全国レベルの方言地図集が刊行され、データも公開されている。地図上のそれぞれの地点の語形全体の中で都と同じ語形が占める割合（%）を一致度とし、類似性の指標としよう。たとえば、『日本言語地図』においてA県B市の語形が合計100あったとして、そのうち35が都と同じ語形であるなら、A県B市の都との一致度は35（%）となる。地図上の全ての地点について、一致度を求め、距離との関係を捉えてみようというわけだ。なお、距離の扱い方は、直線距離や道路距離、鉄道距離などいろいろ考えられるが、ここではもっとも単純な直線距離（正確には大圏距離）で扱う。

『日本言語地図』のデータに基づき古（いにしえ）の都、京都との一致度と京都からの距離の関係をグラフにしたのが図1である。北海道を除くと、都からの距離に応じて、一致度は下がっていくことがわかる。

京都は、平安遷都以降、約1000年にわたって都であり続けた。そのことにより、京都を中心とした畿内のことば、今でいえば関西弁が、かつては標準語の地位を占めていた。近世に入り、江戸時代中期以降は、実質的な中央が江戸に移行する。さらに明治に入ってからは、江戸から名前を変えた東京に都が遷り、標準語も東京のことばを基盤とするものに代わった。それでは、新しい都、東京を元にすると、一致度と距離の関係はどのように現れるだろうか。

図2は、『日本言語地図』に基づき、東京との一致度と東京からの距離の関係を表している。基本的に図1と類似していることがわかる。新しい都であっても、そこからの距離が離れると、それに応じて一致度が下がる（北海道を除く）。中心地としての都からのことばの放射と伝播のようすがグラフによく反映されているようだ。つまり、京都から東京へと都が交代しても、都と地方の言語的一致度と都からの空間距離の間には一定の関係が保たれていることになる。

しかし、である。これは二都が醸し出した、幻想に過ぎない。

■どこでも「坂」の上

図1と図2は、比較する元を京都や東京といった都に設定することにより得られたグラフであった。京都や東京を選ぶことの根底には、「都」だからそこを元にする、というバイアスが最初からかかっていることは明らかである。それでは、任意の地方を比較の元に設定するとどうだろうか。

図3（51頁）は、『日本言語地図』のデータを使い、比較元を山形県に設定したグラフである。都を元にした図1・図2と同じようす――近くほど一致度が高く、遠くほど一致度が低い――が描き出されている。

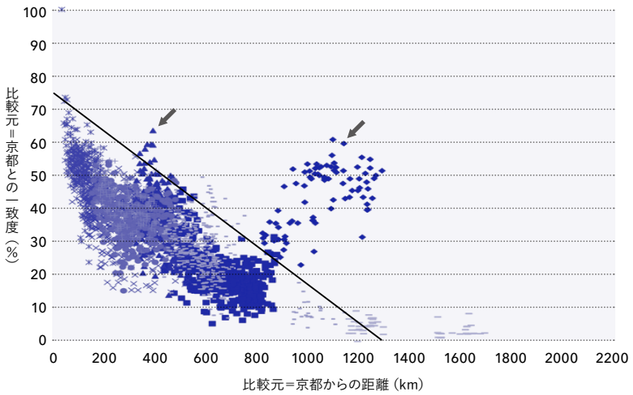
実は、どこを比較元に設定しても、基本的には同じような結果が得られるのである（ただし、特異かつ重要な例外がいくつかあり、そのうちの2点については後述する）。これが意味するところは、ことばは、近いところほど似ていて、遠くなるほど異なる、ということである。つまり、あたりまえといえば、あたりまえのことを表しているに過ぎない。「方言周圏論」を想定しがちなのは、「方言」に向き合うにあたり、「都」や「標準語」などに発想が拘束されていることの投影である。

方言の一致度を分布として見た場合、全体としてはなだらかな傾斜＝「坂」を示す。この「坂」は、任意の場所を頂点として、空間的に離れるほど、ことば（方言）も離れることを表している。このことは一般則として確認されることから、どこであっても坂の上にあると見なすことができることになる。

■「崖」のような「坂」もある

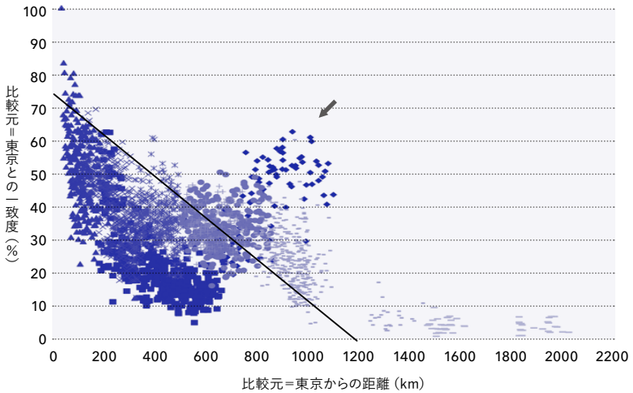
同じ傾斜でも、最初からその坂がある場合と、平らなところからその坂にたどりついた場合とでは、印象がずいぶんと異なる。後者の場合、急に現れた坂は、崖のようなイメージを与えるだろう。

■図1：京都からの距離とことばの一致度



● 右下がりの線で示したのが「坂」であり、遠く離れるほど、ことばの一致度が低下することを示している。矢印で示したのは、二つの「峰」（右が北海道の「峰」、左が東京（関東）の「峰」）。

■図2：東京からの距離とことばの一致度



● 右下がりの線で示した「坂」と矢印で示した北海道の「峰」が確認される。

図1〜3は、『日本言語地図』に基づく。この地図集はおもに語彙（かまきり、さつまいも、とんぼ等）を対象とする。「坂」らしいようすは、語彙で顕著に現れる。それに対し、文法（時制、否定過去、活用など）を対象とした場合には、一定空間内ではあまり傾斜を見せず、その先でガクンと一致度が下がる「崖」が確認されることがある。

『方言文法全国地図』は、その名の通り、文法を対象とした方言地図集である。『日本言語地図』と『方言文法全国地図』で傾斜の現れ方が顕著に異なる例を図4に示した。この図では、比較元を和歌山県に設定し、近畿地方内のデータの現れ方を示している。語彙を対象とする『日本言語地図』（LAJ）では、全体が「坂」として現れている。それに対し、文法を扱う『方言文法全国地図』（GAJ）では、全体がフラットで、遠方（近畿地方の外縁部）に行くと最後に「崖」として落ち込むようすが見える。

両者の異なりは、方言が有する言語として、その本質である意思疎通の道具、そしてそれを根幹で支える文法が持つ高いシステム性と無関係ではない。同一の方言圏（この場合、近畿方言）である近畿地方の内部で、文法が傾斜的・連続的に移行することは、言語の共有性に照らすと、望ましいことではない。なるべく均質であることが文法には求められるわけで、そのことがグラフにおけるフラットな形状に現れている。同時に方言圏から離れる場合には、共有性にこだわる必要はない。これらのことが「崖」として顕現している。

■二つの「峰」

図1と図2において、北海道は、遠いのに一致度が高いという、明らかに特異な現れ方を見せている。一致度の高いところが遠くにあり、そのことが「坂」の原則から外れているために、グラフの形状は、比較元から見ると、あたかも、彼方にある「峰」のようだ。

この「峰」を生み出した要因が、移住にあることは明らかである。北海道では、近代以降、本州各地から開拓を目的とする大規模な移住があった。このために、北海道では、移住元のことば（方言）が持ち込まれ、移住先で保持されるとともに、異なる移住元の人どうしのコミュニケーション言語として標準語が積極的に活用されることになる。ただし、元方言の保持については、きわめて部分的であり、全体としては標準語に向かい、約2世代でほぼ完了することが知られている。

これらのことが比較元から遠く離れているのに、一致度が高い北海道の顕著な「峰」を発生させたと考えられる。

ところで、図1の400kmあたりを注視してほしい。わずかではあるものの、「坂」の原則から外れた尖りが見られる。北海道ほどは目立たないが、ここにも「峰」がある。この「峰」にあたる場所は、東京を中心とした関東である。京都と東京、つまり東と西はことばが大きく異なるはずなのに、思いがけない類似性がグラフに現れていることになる。

実は、方言分布において、東京は東日本の中で周囲から孤立した、いわば「言語島」のような現れ方を見せることが知られている。たとえば、季節の「梅雨」のことを東日本・関東ではニューバイ（「梅雨入り」ではなく「梅雨」のことである）と言うが、東京では西日本の語形ツユが用いられ、それが現在の標準語にも採用されている。「明後日の翌日」を表すシアサッテも同様である。シアサッテは、東京で用いられ、また標準語になっているが、もとは西日本の言い方であり、東日本の伝統的な方言としてはヤノアサッテ系の語形が広く分布していた。

このような東京のことばの特性は、江戸という街の形成と無関係ではないと考えられている。都市としての江戸は、近世以降、地方から人々が集まり、徐々に発展した。その際に西日本のことばが導入されることがあった。直接の要因は異なるにしても、近代以降の北海道の形成と通じるところがある。規模や展開速度の違いには留意が必要であるが、共通項として移住があるのは確かである。そして、そのことが北海道と東京（関東）の二つの「峰」を形成したわけである。

なお、北海道の「峰」の顕著な現れに比べると、東京（関東）のそれはあまり目立たない。ただし、グラフが示すように一致度の数値にはそれほど差があるわけではない。北海道の「峰」を目立たせている「坂」の原則からの大きな外れ方は、北に偏り、かつ面積が広いという空間的特徴に起因する。同じ2500メートルの山でも、2000メートル級の山脈の中にあるか、海の中から直接そびえるか、さらには山容により、見栄えは大きく異なることを思えば、理解しやすいだろう。

■坂・崖・峰と人のつながり

方言という地理空間上のことばの違いにおいて、近くほど似ていて、遠くほど異なるという「坂」の原則が確認される。これは、近くほど密で、遠くほど疎という日々の交わりの永年にわたる積み重ねを背負った方言の自然な状態を表しているとみられる。

日常的つながりの中核をなす地域コミュニティは、そこで使われることば（方言）に焦点を当てると、地理空間上の方言圏として捉え直すことができる。方言が有する伝達道具という言語の本質は、文法の共通性を基盤に、方言圏を「崖」として浮かび上がらせる。

「坂」や「崖」に映し出されたような静穏な状態が永遠に続くとは限らない。移住のような新たな交わりが外からもたらされると、自然状態である「坂」の原則がくずれ、そこで起こった細波（あるいは、荒波かもしれないにせよ）は、新しく「峰」として現れることになる。

ここに示したグラフは、いずれも、50年前の『日本言語地図』、30年前の『方言文法全国地図』に基づく。現在の状態は『新日本言語地図』（2010〜15年調査）で見ることができる。ここでは省略するが、『新日本言語地図』を分析すると、「坂」が健在である一方で、東京（関東）の「峰」は見えづらくなっている（北海道の「峰」は今も明瞭である）。かつて、新たな交流が生み出した江戸・東京の「峰」は、約400年にわたる歳月を経て、日々の交流を日常風景とするごくありきたりな状態の「坂」の中に埋没しようとしている。

参考文献

『共通語化の過程――北海道における親子三代のことば』（国立国語研究所編、1965年、秀英出版）

『日本言語地図』全6巻（国立国語研究所編、1966〜74年、大蔵省印刷局）

『方言文法全国地図』全6巻（国立国語研究所編、1989〜2006年、大蔵省印刷局・財務省印刷局・国立印刷局）

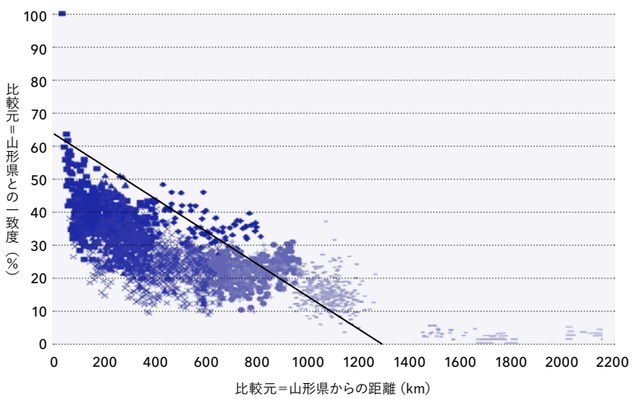
『新日本言語地図』（大西拓一郎編、2016年、朝倉書店）

第5回語言理論和教学研究国際学術研討会「方言区画論与地理語言学」（大西拓一郎、2017年、中国・貴州　興義民族師範学院）

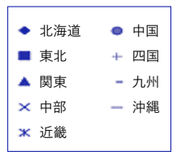
『日本の方言地図』（徳川宗賢編、1979年、中公新書）

Onishi, Takuichiro (2017) "Standard Japanese and standardization of Japanese viewed from geolinguistics" Methods in Dialectology XVI. NINJAL, Tachikawa.

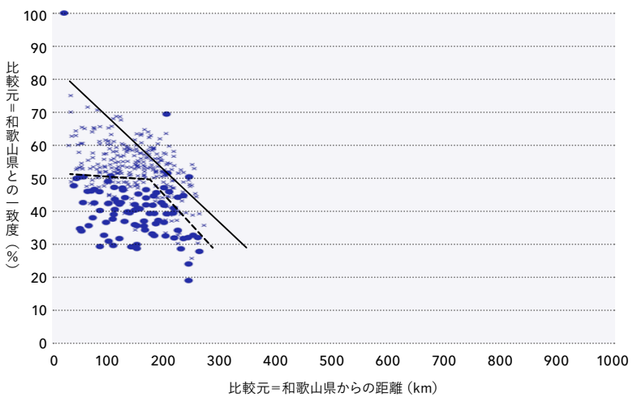
■図3：山形県（東北）からの距離とことばの一致度



● やはり右下がりの線で示した「坂」が現れる。



■図4：語彙の「坂」と文法の「崖」（和歌山県からの距離とことばの一致度）



● 距離と一致度の関係を見ると、語彙を扱った『日本言語地図』（LAJ）のデータでは実線で示した「坂」が現れるが、文法を扱った『方言文法全国地図』（GAJ）のデータでは点線で示した「崖」のような落ち込みが現れる。

わたしと奈良

文＝はな
Hana

画＝浅妻健司

東京から新幹線に乗って、京都駅で下車。そこからまた電車を乗り換え、緑豊かな田園地帯を走り抜けると、大好きな仏像たちが住む街、奈良に到着です。

「京都駅から電車を乗り換える」このワンクッションが、都内に住む多くの方々に「奈良は遠い」と感じさせているようですが、むしろ大勢の観光客が下車する京都駅から、また別の世界へと誘ってくれる電車は、銀河鉄道999級のワクワク感が味わえるのでオススメ！ 日本最古の仏像たちがいらっしゃる奈良にたどり着くまでの道のりも時間も、全てがお目当ての仏像に会った時に味わう喜びへと、つながっていくのです。ここは仏像が住む世界への玄関口。トントン、と扉を叩けば、仏像たちが笑みを浮かべて、私たちを歓迎してくださいます。

どこまでも続く菜の花畑に田んぼ道、奈良県の明日香村にたどり着くと一瞬、タイムスリップしたような気分になる。飛鳥時代に、日本で初めて誕生した仏像がこの明日香村に佇む飛鳥寺に鎮座されています。飛鳥寺の釈迦如来さまは609年に、渡来人の血を引く止利仏師によって制作されました。奈良時代、平城京に都が置かれるまでの時代も、奈良は日本の文化の中心であり、百済から仏教と共に仏像を制作する技術が伝わり、この地で開花したのです。同じ飛鳥時代に、聖徳太子が建立した斑鳩の法隆寺には、止利仏師が制作した釈迦三尊像が。さらに、百済観音さまや救世観音さまが、飛鳥時代の仏像の特徴でもある杏仁形の目とアルカイックスマイルを浮かべ、1400年以上経った今も、この奈良から私たちを見守り続けてくださいます。

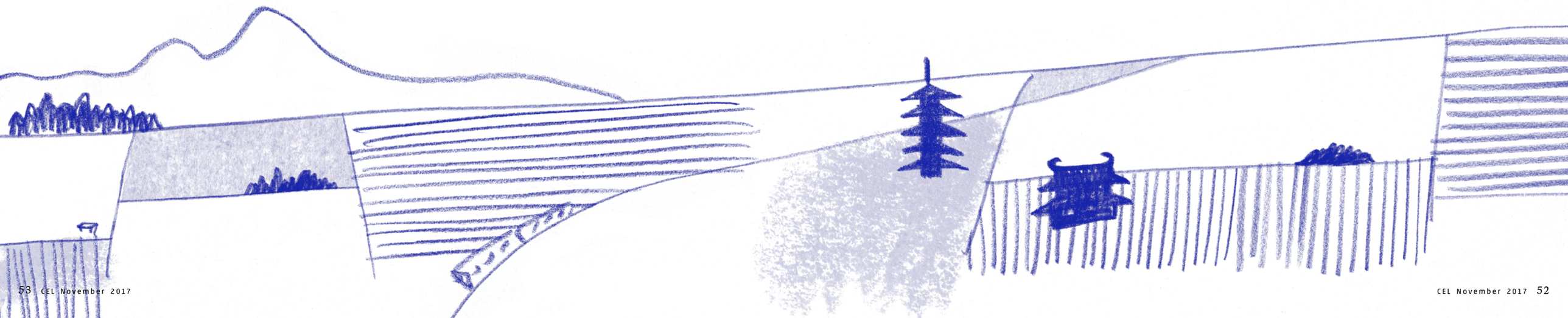
私がそもそも奈良の仏像に興味を持ち始めたのは、大学生の頃でした。比較文化学科の美術史を学んでいくうちに、東洋美術や仏教美術に興味が湧き、気がつけば、仏像漬けの日々を送っていました。インドから始まり、シルクロードを通って、日本に到着するまでの仏像の歴史を勉強していたので、当時は主に、日本以外の仏像の研究をしていました。授業中はスクリーンに映し出された仏像や、その仏像が誕生した土地の写真を見ながら、各国の文化の流れを比較していたのですが、興味深かったのが、その国を代表する仏像の技術、さらにはファッションやアクセサリーまでもが当時の流行を反映しており、仏像そのものがその時代の「最先端」だったことです。例えば、シルクロードで誕生した仏像の壁画や彫刻に見られる衣装や模様で、当時の文化の交流を垣間見ることができたり。同じように、お釈迦さまがインドの釈迦族の王子だった時代のアクセサリーや衣装が、仏像（修行中の菩薩）にも反映されていたり。同じ時代に生きている人たちを「ハッ」とさせるため、仏師たちも様々な手法で、仏像を制作し、華やかな装飾で彩っていきました。

日本で誕生した飛鳥時代の仏像は、朝鮮半島にある百済からの影響を色濃く残していますが、奈良時代に都が平城京に移り、そこからはさらに国際色豊かな仏像が誕生していきます。飛鳥時代から唐の国へと多くの学生や政治家、僧侶たちが派遣され、中国の最先端の技術や学問、仏教の教えなどを日本に持って帰ってきました。その遣唐使たちの働きもあって、日本の文化は奈良時代に大きく開花したのです。シンボリックなのは、聖武天皇の時代に花開いた天平文化。当時のトップにいた学僧や仏師たちの手によって制作された仏像、「奈良の大仏さま」として親しまれている東大寺の盧舎那仏や、迫力ある戒壇院の四天王、豪華な装飾を身につけた不空羂索観音さまなど、華やかな天平時代が残してくれた数々の仏像たちは、奈良が繁栄した時代の象徴です。

きっと当時の人々は、見たこともないような大きな仏像やきらびやかな仏像、最先端の技術やファッションを身にまとった仏像たちに会いに、全国各地から奈良まで足を運んでいたのでしょうね。そして、初めてその仏像群を目にした瞬間、どんなことを感じたのでしょう。当時は金箔や色が鮮明に残っていたので、そのキラキラした光景や仏像の大きさに、相当おどろいたことでしょう。私が奈良が大好きな理由はやっぱり、そんなロマンが今でも息づいているところ。そして、いつ訪れても1400年の時空を超える景色に、ドキドキ、ワクワクさせられるところです。

奈良は、日本の仏像界を代表するスターたちが住む街。これからも京都駅から電車を乗り継いで、大好きな仏像たちに会いにいきますよ！

はな モデル、タレント。神奈川県横浜市出身。2歳から横浜のインターナショナルスクールに通い、17歳からモデル活動を始める。上智大学進学後もモデル活動を続け、テレビの司会、ナレーション、エッセイの執筆など活動の範囲を広げる。英語、フランス語に堪能。趣味は、お菓子づくり、仏像鑑賞。2017年、国宝応援大使就任。
Instagramアカウント @hanalovestaco



「交流（つながり）」を問い直すための10冊

あらゆる物・人・情報が交流する場である都市・地域は、
過去からのさまざまな交流（つながり）が集積した場でもあります。
より豊かで多様なつながりを問い直すために参考となる書籍を選びました。

1 『木村兼葭堂のサロン』

近世大坂の町人学者にして類い稀なる知的・文化的ネットワークから一大サロンを築いた兼葭堂の評伝。書画や本草学、医学、蘭学の貴重な文物や標本を蒐集した自邸には、画家、文人、学者だけでなく、大名や外国人までが交流を求め、支援を惜しまなかったという。知的共鳴でつながる江戸後期知識人たちの有り様が伝わってくる。

中村真一郎＝著
新潮社／2000年

2 『全集日本の歴史第9巻 「鎖国」という外交』

近世日本を語るキーワードのひとつ「鎖国」。東アジア近世史を専門とする著者は、朝鮮通信使の研究を入り口に、長崎、対馬、薩摩、松前の「四つの口」を通じて中国・朝鮮などと交流をもち、対外政策を決めていた日本の姿を明らかにし、鎖国が「外」を意識した主体的な選択であったことを描き出す。新しい近世像を提示する書。

ロナルド・トビ＝著
小学館／2008年

3 『宗教とツーリズム ――聖なるものの変容と持続』

近年、教会や寺社仏閣、聖山など宗教スポットを巡るツーリズムが盛んに行われている。しかし編者はそれらを「断片化し非文脈化した宗教を“パーツ”として消費するという事態」と懸念する。社会学、人類学、地理学、観光学などの成果を駆使しつつ、宗教学的視点で論じた宗教ツーリズム研究の入門書。

山中弘＝編著
世界思想社／2012年

4 『新版 空海の夢』

〈日本〉をプログラムした天才・空海のイメージの森に分け入り、現在の視点から、現在の言葉を駆使して縦横無尽に語ることで、これからの日本のあり方をも考えようとする無類の書。生命や世界の成り立ち、言語、宗教と国家の関係など、空海の曼荼羅的な思索と格闘の痕跡は、時を超えて今を生きる人間に多くのヒントを与えてくれる。

松岡正剛＝著
春秋社／2005年

5 『江戸の市場経済 ――歴史制度分析からみた株仲間』

最先進国イギリスに匹敵する経済成長を遂げていた江戸日本。なぜ特定の時代と地域に特化した経済発展が見られたのか。著者は従来の安定政権、貨幣制度の整備、農商工分離の身分制度という定説からではなく、「株仲間」というシステムに注目し、歴史制度分析という経済史の新分野から解き明かす。丁寧に検証した説得力ある一冊。

岡崎哲二＝著
講談社選書メチエ／1999年

6 『犬の伊勢参り』

「一生に一度は伊勢参り」の慣習があった江戸時代に、人間の代わりに犬が参拝することがあったという。さまざまな書物に残された「犬の伊勢参り」の記述をもとに、著者はこの不思議な現象が人々の信仰心を投影したものであったことを明らかにする。ファンタジーのような事実を成り立たせた近世日本人の姿を知ることができる一冊。

仁科邦男＝著
平凡社新書／2013年

7 『江戸はネットワーク』

趣向を同じくする人のつながり「連」に着目し、山東京伝、蔦屋重三郎、平賀源内、松尾芭蕉など江戸期を代表する文化人の活動が「連」のネットワークあってのものだったことを明らかにする。個々の人物がその場に集い、刺激しあいながら変化し新しいものを生み出すという、動的な文化を創出する「連」のあり方に今こそ学ぶべきである。

田中優子＝著
平凡社ライブラリー／2008年

8 『文明の海洋史観』

本書は、国際社会を中心とする世界史の舞台は大陸ではなく、島々と海からなる「多島海」にあるという海洋史観をさらに進め「近代はアジアの海から誕生した」と説く。その壮大な歴史観は、「唯物史観」や「生態史観」のような戦後、誰も疑うことがなかった陸地中心の考え方を真っ向から切り捨てながら、日本の将来指針をも提示していく。

川勝平太＝著
中公文庫／2016年

9 『大阪商人』

かつて司馬遼太郎も師と仰いだ歴史学者による近世経済史。1958年の初版刊行当時、戦後マルクス主義の潮流から著者の人間味あふれる経済史観は異彩を放つが、その魅力は今も色褪せることはない。伏見・道修町（どしょうまち）の貿易品を取り扱う町人をはじめ、住友家歴代、呉服商の大丸など、「天下の台所」の商人たちの生き様を通して商都大坂の活況を描く。

宮本又次＝著
講談社学術文庫／2010年

10 『川の文化』

「お前は川の橋の下から拾ってきた」と言い習わされていたように川が身近だった時代はとうの昔。大小の河川が上流から河口を目指し大地を刻みながら多彩な風景と文化を育んできた「川」の重要性を、今こそ見直す必要があるのではないか？舟運の歴史と川船の種類、川の狩猟、渡しと橋、年中行事と信仰など豊富な事例で語りつくす。

北見俊夫＝著
講談社学術文庫／2013年

CELからのメッセージ

北前船はなにをはこんだのか？

大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長
池永寛明
Ikenaga Hiroaki

海上交易で栄えた18世紀中頃の松前城下を描いた「松前屏風」
所蔵／函館市中央図書館

関ヶ原古戦場に立つと、意外に狭い空間に驚く。15万人が東西に対峙した関ヶ原で古代に壬申の乱があった。都を守る関所があり、東国に通じる街道、日本海に通じる街道が縦横に交わる。この関ヶ原を含む琵琶湖東岸は、丸餅と角餅など食の東西境界。道が文化をはこんだ。

かつて道は軍事防衛の観点から細かった。人は移動できるが、物をはこぶには適さなかった。川や堀にて地域の物が河口の湊に集められ、積み替えられ、次の場所にはこばれた。川が文化もはこんだ。

山形県の酒田を歩くと、京人形やしつらい、人々の会話に上方を感じる瞬間がある。最上川水域の物を集め、河口で北前船に積み替え全国にはこび、全国から船が戻り物がおろされ、最上川流域に流通し、物とともに情報が川筋文化と混じりあった。海が文化をはこんだ。

この北前船は蝦夷地から大坂まで、西廻りに日本海、瀬戸内海の各湊に寄航し、各地の情報を収集・掌握し、商品を売り買いしていく。北前船は各地域の物を湊にはこび、各地域の情報を受・発信して各地の産業・経済・文化を育てた。

北前船をはじめとする廻船の出港地であり終着地であった「天下の台所」と呼ばれた大坂の船場に、国内や海外の物と情報が集まり、編集し価値をつけ、淀川や堀を通じて畿内に、街道を通じて全国にひろげた。人が集まるところに情報が集まり、溜まり、発酵させ、求める人に伝えられた。価値ある情報には速度を付ける工夫がおこなわれた。たとえば堂島の米相場情報は旗振り通信によって1時間以内で江戸に届いていたそうだ。

また大坂には廻船や街道を通じて国内の食材が米、青物、魚市場に集められた。この新鮮で豊富な食材に、蝦夷の真昆布出汁を掛けあわせ調理された料理をとりながら商談がおこなわれ、まとまれば手打ちとなる。その商いの最高の瞬間に大坂料理の場が選ばれ、大坂商人たちのおもてなし精神が接待の場に注がれ、大坂料理を高度に育てあげた。

このように水路・陸路を通じて物と情報を集め、学びあい、交流しあい、掛けあわせ、混じりあわせ、変換させ、価値ある物、ビジネス、産業が次々と生みだされた。それらはひとりの天才が考えたのではなく、同業・同志が集まり、「それ、いいな」「これ、いけるのとちがう？」といったワイガヤからイノベーションが生みだされた。現代も同じはずだ。

CELホームページ
http://www.og-cel.jp/
エネルギー・文化研究所（CEL）の活動内容、
「CEL」バックナンバーをご覧になれます。
※CELホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

Facebookページ
https://www.facebook.com/osakagas.cel

Volume 117
November 2017

特集
ルネッセ「交」
——交流を問い直す

2017（平成29）年11月1日発行

発行　**大阪ガス㈱**
エネルギー・文化研究所（CEL）
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人　池永寛明

企画・制作　熊走珠美

編集人　日下部行洋

編集　㈱平凡社

アートディレクション＆デザイン　okamoto tsuyoshi +

校正　㈱アンデパンダン

印刷・製本　㈱東京印書館

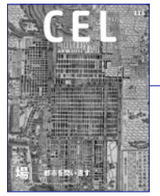
お問い合わせ窓口　大阪ガスビジネスクリエイト㈱
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2017 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

「CEL」バックナンバー

※最新の6号。創刊（1987年）からのバックナンバーはCELホームページに掲載しています。



vol.116　2017年7月発行
特集
ルネッセ「場」——都市を問い直す

vol.115　2017年3月発行
特集
外に出て「日本」を見直す

vol.114　2016年11月発行
特集
外から「日本」を見直す

vol.113　2016年7月発行
特集
学びを学ぶ

vol.112　2016年3月発行
特集
昔の暮らし力

vol.111　2015年11月発行
特集
生活者から見る〝スマート〟

樽問屋八軒